徳島県博物館紀要

第１集

昭和４４年度

徳島県博物館

徳島県博物館紀要

第１集

昭和４４年度

徳島県博物館

徳島県博物館紀要の創刊に寄せて

徳島県教育委員会教育長　向　島　安　市

徳島県博物館は昭和34年12月に開館したので，すでに10年に余って活動したことになる。もともと児童生徒の拠金を建設資金の柱としているので，その活動も，はじめは児童生徒を対象としたものに重点をおいてきた。しかし年を重ねるにつれ展示品の内容にしても，かなり充実したものとなり，博物館の存在価値は広く県民の認めるところにまで至っている。

展示という消極的な活動ばかりでなく，野外採集と標本作りに関する行事とか移動天文教室の開設など，児童生徒へのはたらきかけにも努力し，とくに最近においては，遺跡調査，古美術調査などの調査行動も極めて活溌となってきた。博物館としては，一つの発展と見てよかろう。

徳島県郷土文化会館も起工式を終え，来年度において，その完成を見ることとなった。郷土文化会館の性格については，いまだ詳細なことはわからないが，これによって展示的分野が拡大することは間違いのないところである。それ自体よろこばしいことである。ただ博物館としては，将来どうあるべきか，真剣に考えるときが来たと言えるだろう。

今回，博物館から紀要を刊行することになった。収められているのは，吉岡学芸係長の「入館者状況とその考察」，山川学芸員の「阿波藩の目付について」，立花主事の「鳴門市大麻町谷口山の組合式箱形石棺と徳島県内の組合式箱形石棺について」，天羽学芸員の「徳島県下出土のナイフ形石器・細石器」などである。ともに館員の研究成果で，貴重なものである。博物館で発刊する紀要がどんな形をとればよいか，どんな内容を盛ればいいか，それにはいろいろ意見もあるであろうが，この紀要刊行は，博物館の新しい動きである。

研究ということは，博物館職員にとって必要なことであり，研究活動が加わることによって，館員の間に活気も加わってくる。その研究発表の場をもつということで，紀要発行の意義もでてくる。また研究というものが，展示したものとともに，博物館を利用し研究するものにとって資料提供の役割りをも果たすことになる。

博物館関係者も，紀要第一集を刊行することにより，紀要のあり方を検討することができるわけであり，それによって，よりよき内容の第二集第三集が続刊されることに期待を寄せることにもなる。

思いつくままのことを申し述べ，博物館紀要創刊のおよろこびのことばにかえる次第である。

昭　和　45　年　3　月

徳島県博物館紀要発刊にあたって

徳島県博物館長　林　　利　秋

博物館において各種の研究調査がいかに重要な位置を占めているかは，博物館法において「……併せてこれらの資料に関する研究調査をする機関」と定義され，資料の収集展示，教育活動と並んで，博物館の三大機能の一つにあげられていることを見ても明らかであります。また，資料の収集展示もその背景に専門的技術的研究があって，はじめて真の資料としての価値が発揮されるものであって，こうした意味から研究は展示と表裏一体の関係において，博物館の教育的役割を支えていると云うべきであります。

日頃，総合博物館としての当館は，考古，科学，生物，美術等各部門において，資料の収集とこれに関する各種の研究調査を継続し，展示の充実と管理運営面の向上に資するとともに，また，研究同好者との連けいをはかるのに役立ててまいりました。こうした私どものいとなみを収録し，先輩諸賢のご批判やご指導をいただく機会を得たいとかねてから念願しておりましたところ，このたび関係者の深いご理解やご支援のおかげをもちまして「徳島県博物館紀要」の発行が実現の運びになりましたことは，この上もない喜びに存じますとともに，感謝にたえないところであります。

現在わが国では教育の全領域に亘って，種々反省や検討が行われておりますが「生涯教育」の分野の一半を担う博物館もそのらち外ではなく，多くの大きな課題をかかえていると申さねばなりません。こうした時期にあたって博物館における研究調査の重要度は従前にも増して一層高まっていることは，関係者のひとしく肯定されるところと思うのであります。私どもはここに本紀要発行の意義の大きいことを認識し，専門的研究はもとより，これからの博物館のあり方などにも視野を拡げ，この紀要をして巾広い性格を持たせて館運営に資したい所存であります。

もとより初版のことでもあり，何かと不備な所も多いかと思いますが，資料として関係の方々にいくらかでもご参考になり，あるいはこれを通じ当館の活動状況等ご理解いただくたすけともなれば，まことにこの上ないしあわせと存ずるのであります。

なにとぞご忌憚ないご意見等およせいただき，誕生したばかりの本紀要が今後立派に成長致しますよう，格別のご指導とご鞭撻をお願い申上げまして発刊のごあいさつと致します。

昭和45年3月

目　　次

1．徳島県博物館紀要の創刊に寄せて……向島　安市

2．徳島県博物館紀要発刊にあたって……林　　利秋

3．入館者状況とその考察……吉岡　良知…1

4．阿波藩の目付について……山川　浩実…8

5．鳴門市大麻町谷口山の組合式箱形石棺と
　　徳島県内の組合式箱形石棺について……立花　　博…20

6．徳島県下出土のナイフ形石器・細石器……天羽　利夫…33

7．徳島県の洞窟動物相……木内盛郷・吉田正隆…41

入館者状況とその考察

学芸係長　吉　岡　良　知

1. 開館以来10年間の入館者状況

表1　入館者の状況

年度	開館日数	有料入館者				無料入館者			計
		大人	小人	大人団体	小人団体	学校団免除	特別展	その他	
34 12月11日～3月31日	89	6,579	3,506	(48) 3,188		16,615			29,888
35	291	10,068	4,462	(82) 8,210		28,238			50,978
36	286	9,077	6,205	(61) 9,667	(32)4,817 (29)4,850	11,440			36,389
37	289	9,414	9,122	(103) 10,272			21,844		50,652
38	287	10,705	10,899	(109) 8,182			18,185		47,971
39	287	11,227	10,466	(95) 7,197			18,589		47,479
40	288	12,488	11,123	(57) 5,779	1,252 4,527		14,399	1,128	44,917
41	289	11,896	11,729	(67) 5,430	650 4,780		16,942	1,642	47,639
42	286	11,284	10,649	(69) 4,432	1,007 3,425		13,597	213	40,175
43	289	13,793	13,601	(59) 4,131	263 3,868		20,428	506	52,459
計	2,681	106,531	91,762	66,488		56,293	123,984	3,489	448,547

註　1．開館当初学校団体に限り無料取り扱いをしている。
　　2．運営方法が変ったことにより一部計数の扱いに統一を欠いでいる。
　　3．（　）は団体数

問題点と対策

a）全般的にみると4～5万を軸としてサインカーブを示している。つまり横ばい現象である。当館の設置条件を総合的にみて，入館者の平均値が4～5万ということは，果して妥当な数値であろうか，徳島県，徳島市の人口（末尾資料参照）からみても，決して多い数とはいえない。（妥当な数値の算定について今後研究する計画である）

b）有料の個人入館数をみると，大人，小人ともに増加している反面，団体が減少の傾向にある。その事由として

① 開館当初は宣伝が浸透しやすい

② 珍しい

③ 一部入館無料

④ 展示更新が不十分である

⑤ マンネリ化などが考えられる

そのような状態にありながらも学校団体においては遠足，社会見学などの行事があって比較的安定した数値を示しているのに対し，大人の団体が非常に減少している。もちろん学校団体が安定しているなどと安心してはおれない。同じ市内にあり，距離もそんなに離れていないにもかかわらず動物園の利用者が来館者を遥かに上まわっている事実を冷静に検討する必要がある。

団体入館者の増加をはかるためには，ある程度の積極的勧誘行為が必要である。それぞれの団体の企画に当っている人は，例えば社会見学という行事を計画しても，その目的地の選定に頭を痛めているのだからそのような機関に働きかける，そうしたシステムの確立が大切である。来館者には団体のための解説員を配置し，昼食時には弁当を食べる場所を提供し，できれば湯茶を接待するくらいの処置があってもよい。私達の仕事は資料の収集，保存，研究と学問的性格をもつけれども，それらの成果を利用する人があることが前提であり，その意味において一種の接客サービス業である。この点をおろそかにすると，せっかくりっぱな目的をもって設置された博物館も近年めざましい勢いで台頭しつつあるレジャー・ブームに押し流され，自然消滅の非運をたどることになろう。

c）次に特別展のあり方であるが，入館者を増加させる最も効果的力をもつものであるだけに，その運用が重視されねばならない。昭和43年の計数をみた場合，特別展入館者が全入館者の約4割をしめている。このことは常時展示の弱体をものがたっている。設立目的によってこの比率も異なると思うが当館の場合は総合博物館を標傍し，せまいながらもそれぞれの部門の展示室をもって運営されている以上，常時展示の入館者の増加を考えねばならない。そのためには展示に何か魅力が必要である。魅力を生む第一の要素は，変化すなわち展示品の更新であり，観客はこれについてきわめて鋭敏である。しかし何分にも経費を伴なうことが多いので実行は困難であり，見過ごされやすい。他の館を見学していると，ときどき，頭の下がるような展示に接することがある。担当者の愛情がにじみ出た展示，これは経費とは別問題である。

結論すれば，43年度入館者統計は，平常展示にいま少し力を入れと示唆している。

2. 科学室入室者の実態調査

1において大体の傾向はつかめたが，今少し詳細なデーターが欲しいので，科学室の入室者だけにしぼって，アンケート記入による調査を試みたところ，別表のような結果を得た。回収率は，特別展，団体をのぞいた一般入館者総数の3割で，幾分低調であるが，自由投票の形式を採用した関係上いたしかたない。むしろ，ごく少数をのぞいて多くの人がまじめに協力してくれたことについて，参観者の善意を発見した気持である。

別　表

科学室についてのアンケート　　徳島県博物館No.

該当事項の記号を○でかこみ（　）はかんたんに記入して下さい。

1　住　所　　イ　県　外　　ロ　徳島市内　　ハ　徳島市以外の市町村

2　性　別　　イ　男　　ロ　女

3　職　業（　　）（職業分類10種に再編するので具体的に）

4　年　齢　　イ　1～9　　ロ　10～19　　ハ　20～29　　ニ　30～39

ホ　40～49　　ヘ　50～59　　ト　60～69　　チ　70以上

5　ここへ来たのは

イ　初めて　　ロ　2回目　　ハ　3回目　　ニ　ときどき来る

6　この室を見てよいと思うこと

イ　よく整理されている　　ロ　展示内容が統一されている

ハ　理科教育と関連が深く勉強になる　　ニ　係員が親切である

ホ　その他感じたこと

（　　）

7　この室を見ていけないと思うこと

イ　いつも展示が変わっていない　　ロ　資料が少ない

ハ　内容がむつかし過ぎる　　ニ　雑然としてまとまりがない

ホ　その他感じたこと

（　　）

8　特に希望すること

「科学室についてのアンケート」のまとめ

調査期間　　自 40. 6. 5　　至 41. 5. 30

調査方法　　アンケート用紙と鉛筆を机上においておき，自由に記入してもらった。

A　集計結果

1　住　所

イ	県　外	917
ロ	徳島市内	4,322
ハ	徳島市以外の市町村	2,384
	計	7,623

2　性　別

イ	男	5,816
ロ	女	1,807
	計	7,623

3　職　業

イ	学校生徒	a	小学生　2,506
		b	中学生　1,828
		c	高校大学生　1,479
ロ	一　般		1,810
	計		7,623

4　年　令

イ	1～9	331	ホ	40～49	329
ロ	10～19	5,596	ヘ	50～59	112
ハ	20～29	648	ト	60～69	50
ニ	30～39	545	チ	70以上	12
				計	7,623

5　ここへ来たのは

イ	始めて	3,003
ロ	2回目	1,080
ハ	3回目	620

ニ　ときどき来る　2,920
計　7,623

6　この室を見てよいと思うこと

イ	よく整理されている	1,015
ロ	展示内容が統一されている	576
ハ	理科教育と関係が深く勉強になる	1,461
ニ	係が親切である	567
ホ	その他　楽しく遊べる／各自で操作できる　など	111
	計	3,730

7　この室を見ていけないと思うこと

イ	いつも展示が変わっていない	346
ロ	資料が少ない	621
ハ	内容がむつかしすぎる	344
ニ	雑然としてまとまりがない	163
ホ	その他　故障品がある／実験装置が少ない／雑音（ロープウエイの音）が多い　など	112
	計	1,586

8　特に希望すること

この項を記入したものは少なかったが，その大部分が宇宙，機械，化学とより広い範囲で展示をのぞむ意見であった。

B　**昭和40年度入館者月別一覧表**

月別	開館日数	有料 大人	有料 小人	有料 一般団体	有料 小人団体	無料 特別展	無料 一般	人数計
40年6	25	6,699人	545人	348人	0人	452人	8人	2,052
7	26	769	962	0	115	22	13	1,881
8	25	2,432	2,092	126	20	553	11	5,234
9	23	462	496	20	0	0	12	990
10	26	746	727	16	1,421	1,801	77	4,788
11	22	634	665	28	476	477	30	2,310
12	22	469	672	20	508	504	81	2,254
41年1	21	574	830	0	0	1,868	62	3,334
2	23	668	831	0	0	2,709	25	4,233
3	26	1,310	1,438	15	760	1,403	61	4,987
4	25	1,517	1,305	20	194	2,867	96	5,999
5	24	1,554	782	20	2,107	803	1,208	6,474
計	288	11,834	11,345	613	5,601	13,459	1,684	44,536

各項目に従って検討する。

(1)　住　所

イ　県外客のほとんどが，「阿波踊り」に来徳した人達である。もしも徳島市周辺に，すばらしい観光資源が存在すると仮定すれば，この数も変わってくるだろう。

ロ　市内在住者が多いのは当然であろう。

(2)　性　別

男女比が3：1というのは，やはり女性と科学は縁が薄いということか。

(3)　職　業

実際記入は職業分類に従がったが，集計が煩雑になり，意味もないのでこのように処理した。当館だけでなく，全般的に中学生の来館が意外にないようである。進学事情，クラブ活動などが影響していると考えられる。

(4)　年　令

ロ10〜19が全体の約7.5割をしめており，極端な分布は正常とは云えない，外国の事情は別にしても，中・高年令層の来館を促進する方策が講ぜられるべきであり，へ，ト，チの世代の増加をはかることが社会教育であり，博物館の使命である。

(5)　イの初めてと，ニのときどき来る，が同数になっている。先に述べたことであるが，魅力ある展示が行なわれておればニの数は増大することになる。イ，ニが相競って増加することが館の発展につながることになる。

(6)　科学室の運営において特に重点をおいた理科教育との関係が認められたことは喜ばしい。なお累計数は低いが，将来の博物館，特に科学分野の展示方式にはホの内容が重視される趨勢にある。

(7)　6の総計3,730に対し，7の内容が短所の指摘であるために遠慮したのか約半数の1,586となっている。その中で，ニの163は6のイ，ロと矛盾するが，小学校の低学年の頭でみると，まさに雑然とうつるようである。イに対し，もっと多いものと覚悟していたが案外であった。いずれにせよ，私達当事者がウイーク・ポイントとして，その対策に頭を痛めていることは，参観者にも反映する模様である。

参考資料　1

市立動物園入園者状況（昭和40〜43年）

年度	開園日数	有料入館者 大人	有料入館者 小人	有料入館者 (大人団体) 人数	有料入館者 (小人団体) 人数	総計	備考
40	362	98,995	52,813	(　) 13,273人	(　) 35,731人	200,812	
41	362	99,272	54,199	11,355	32,639	197,465	
42	362	101,364	57,187	11,809	34,013	204,373	
43	363	96,660	56,524	11,649	32,649	197,482	

入園料（円）	個人	団体
大人	60	50
小人	20	15

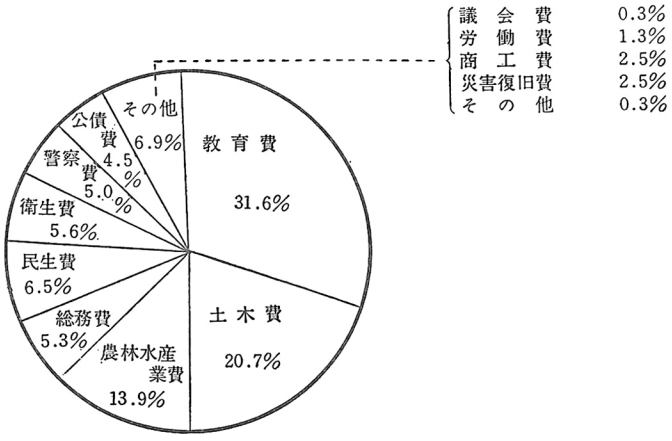
参考資料　2

徳　島　市　の　概　況

項　　目	単　位	県全体	徳島市	備　　考
面　　積	km²	4,143.73	187.44	43年12月末
人　　口	人	815,115	222,221	〃
人口密度	1 km²	197	1,185	〃
小学校		330	29(33)	〃
中学校		135	15	〃
高等学校		65	15	〃

参考資料　3

県予算の中に占める教育費の割合い



参考資料　4

徳　島　県　の　概　況

項　　目	単　位	全　国	徳島県	対全国比対	摘　　要
面　　積	km²	377,371.0	4,143.73	0.011	43年国土地理院
人　　口	人	98,274,961	815,115	0.008	40年国勢調査
人口密度	1 km²当り	266	197	0.74	〃
15才以上人口	人	73,108,779	595,836	0.008	〃
米収穫量	100トン	144,528	1,072	0.007	43年農林水産　統計年報
自動車登録台数	台	7,688,101	45,649	0.006	43年日本統計年鑑
銀行預金残高	億円	270,377	1,260	0.005	42年度末日本銀行
1人当り県民所得	円	345,362	283,799	0.822	42経済企画庁

小　学　校	校	25,262	330	0.013	43年学校基本調査
中　学　校	〃	11,463	135	0.012	〃
高等学校	〃	4,819	65	0.013	〃
小学校児童数	人	9,383,204	76,213	0.008	〃
中学校生徒数	〃	5,043,059	45,588	0.009	〃
高等学校生徒数	〃	4,522,174	39,591	0.009	〃

参考資料　5

展　　示　　室

名　　称	階	面　積㎡	主　な　展　示　資　料
郷　土　室	3	105.0	石器，土器，埴輪，金属，石製品，古瓦などの考古資料及び歴史，民俗，美術に関した資料
科　学　室	4	242.8	電気に関する基礎実験装置と応用機器
産　業　室	4	83.5	天文教材と一部郷土産業に関するもの
美　術　室	4	45.0	本県出身有名作家の絵，書，版画など
生　物　室	5	80	県産植物を中心に鳥や哺乳動物，昆虫類
地　学　室	5	43.5	主に県産の岩石，鉱物，化石，地質現象
集　会　室	5	242.8	特別展示会場及び貸部屋として運営
会　議　室	5	40	館本来の行事のない場合貸部屋として利用

阿波藩の目付について

山　川　浩　実

はじめに

周知のごとく，諸藩の目付は，藩士ならびに藩役人の非違非曲の監察・検察を任とする職掌を有するものであり，したがって目付は，藩士ならびに藩役人を束縛する性質を有する以上，いわば行政百般をも監視し，束縛する権能を兼備していたともいい得る。すなわち，目付は藩政を理解する上において，きわめて重要な意味をもつといわねばならない。

阿波藩における目付の研究は皆無で，その存在・職掌等は概略的にしか捉えられているにすぎない。本稿は，この目付制を通じて，阿波藩の監察制度を把握しようとするものである。

1　目付の地位

阿波藩における目付の職が，いつ設置されたのか定かでないが，阿波藩の公式編纂史書である「阿淡年表秘録」寛永９年８月の条によると，植拓（柘）庄太夫・長井六郎左衛門・長谷川杢兵衛の３名が，蔵入地検見役と合わせて横目役(宝永２年２月，横目を目付と改称)を命ぜられており，現在のところこの３名が，史料の上で確認できる最古の目付と思われる。それ以前における目付（横目）の存在は，充分考えられるが，史料の上で確認することができない。[註(1)] しかし少なくとも目付の支配下にある下横目（宝永２年２月21日，下横目を小目付と改称）が，[註(2)] 寛永９年２月すでに存在している以上，[註(3)] この時点における目付存在の可能性は認められる。[註(4)] 阿波藩の目付は，藩の全機構の中でどのような地位を占めていたのか。この問題に対する手がかりとして，まず，目付の役に補任される以前にどのような役にあったかを示したのが表(1)であり，そして目付の役からどのような役に転じたかを示したのが表(2)である。しかし表(1)，(2)ともに全目付について網羅したものではなく，補任前後の役職が，判明してる場合のみであるから，その点，不備があると思われるが，目付が藩の機構の中で，どのような地位を占めていたかを示す手がかりになると思われる。

まず第一に注目すべきことは，目付への転出は，正徳年間ごろから以後，奥小姓が全体の33％を占め，目付の転出先は，天和年間ごろから以後，本〆（締）役が全体の61％を占めている事である。奥小姓から目付への転出は，「将卒役令」[註(5)] に「諸手御目付は，時至り奥の御小姓杯の内より被　仰付」とあり，目付への転出コースは勤役・使番等もあったようであるが，奥小姓が目付への転出コースを占めていたことがうかがわれる。そして奥小姓―目付のコースを経た者は，さらに本〆への昇進コースがあったと考えられなくはないが，しかし目付と本〆役との兼職の事例が元禄９年から天明１年に至る間で10回みられる事により，[註(6)] しかも目付の兼職については，そのほとんどが本〆役のようであり，[註(7)] したがって奥小姓―目付のコースを経た者は，さらに本〆への昇進過程があったとする考えは，なお早計のようである。しかし奥小姓―目付―本〆の昇進過程をとった者も若干は見られ，[註(8)] 少なくともこの昇進過程をとる者にとっては，目付の地位は，奥小姓から目付を経て本〆へ昇進する一過程にすぎ

表 (1)　　寛文4年～天保3年までの目付役補任前の役職

役職名＼年号	寛文	延宝	天和	貞享	元禄	宝永	正徳	享保	元文	寛保	延享	寛延	宝暦	明和	安永	天明	寛政	享和	文化	文政	天保	計
須本本〆(締)		1															1					2
須本目付	1	1														1						3
勤役			1				1									1	1			1	1	6
奏者							1	1					1			1	1					5
使番					1			1														2
奥小姓							1	5	2		1	1	3		1	1	2		1	1	1	20
刀番														3								3
江戸留守居													1									1
普請奉行					1										1	1			1			4
町奉行																	1					1
郡代																				1		1
郡奉行														1								1
蔵奉行												1							1	1?		3
作事奉行																				1?		1
林方代官																	1					1
安宅目付															1		1					2
花畠邸付人													1				1?					2
富田邸屋敷目付																1						1
計																						59

表 (2)　　寛永14年～文政12年までの目付役辞任後の役職

役職名＼年号	寛永	正保	慶安	承応	明暦	万治	寛文	延宝	天和	貞享	元禄	宝永	正徳	享保	元文	寛保	延享	寛延	宝暦	明和	安永	天明	寛政	享和	文化	文政	計
近習																				1?							1
勘定奉行																								1			1
本〆(締)									1		1		1	2			1		2	2		1	2		2	1	16
須本本〆(締)														1											1		2
江戸目付	1																										1
須本目付								1																			1
勤役																										1	1
側目付																									1		1
江戸留守居													1														1
須本町奉行								1																			1
計																											26

註　本表(1), (2)とも「阿淡年表秘録」に拠った

備考　本表(1), (2)とも役職は上からできるだけ役席順に並べた

ない役職であった事は否定できない。

これと対比して，目付に補任される者の家格は，いかなるものであろうか。承応１年から文化10年までの家格の判明している目付20人を「阿淡年表秘録」から抽出すれば，大部分は与士(組士)で19名を占め，残り１名は中老である。与士19名の内，与士の格において目付に補任され，その補任中に物頭に立身した者は15名で，立身しなかったのが２名，補任と同時に物頭に昇格した者は２名である。この目付の補任者について「将卒役令」に「騎馬・無騎馬頭・平士打込に被　仰付」とあり，さらに「阿淡両国高取名面帳」註(9)にも，目付７名の内，与士が６名，物頭１名が補任されており，この分析をほぼ裏付けるものと思われる。すなわち目付に補任される者は，そのほとんどが与士であり，そして一端目付に補任されると，一部を除いて物頭に昇格する事がほぼ認められる。

註(1)　植拓庄太夫の「拓」は，「阿淡年表秘録」には「拓」と記され，「阿波国徴古雑抄」所収，「島原陣備帳」には「柘」と記されている。

(2)　寛永９年８月以前において，文禄１年・慶長19年の各２回にわたり，岩田小太郎（慶長５年，七左衛門と改名）が，文禄の役と大阪冬の陣の先手備の横目役に任じられているが(「阿淡年表秘録」)，あくまでもこの横目は，戦時における備目付（軍目付）としてのみ派遣された横目と考えるべきであろう。その証に，横目（目付）は，元来戦時においては備の監察に当たるべき任にありながら，戦時における備横目としてのみ派遣された横目でなければ，わざわざ「御先手御横目」「御先手備御横目付役」等と，改めて命じる必要などないからである。

(3)　「阿淡年表秘録」によれば，下横目を小目付と改称したのは宝永２年２月と記されているが，徳島県立図書館所蔵呉郷文庫本，建治普雄稿「阿陽忠功伝」巻１には，宝永２年２月21日と記されている。

(4)　藩法研究会編「藩法集　３巻徳島藩」所収，「御国中御家中」寛永９年２月27日付の藩主忠鎮（忠英）名で発した「定」には，すでに小目付の職掌が，陪卒の監察を任とする事が規定されている。

(5)　徳島県編刊「御大典記念阿波藩民政資料」上巻所収

(6)　元禄１，享保１，元文２，寛延１，宝暦１，天明の各４回（「阿淡年表秘録」）

(7)　「阿淡年表秘録」から目付の兼職を示すと，本〆10人，使役（松菊君）１人，勤役１人，側目付１人裏判役１人，蔵入地検見役３人となり，本〆が約６割近くを占める。

(8)　宝暦７年10月佐山市十郎が，奥小姓から目付に進み，同11年６月さらに本〆に進んでいる。又宝暦13年11月大屋紋蔵が，奥小姓から目付に進み，明和７年10月本〆に昇格している。（「阿淡年表秘録」）

(9)　徳島県史編纂委員会「徳島県史」３巻所収

2　職　　掌

阿波藩における目付の職掌は，広範多岐にわたる。すなわち単に監察のみに拘わらず，藩主の供奉ならびに一門の御供（警固役）から，仕置家老の補佐，規則の付達，訴状箱の立合い，規式・慣例の行事，葬礼・法事・祭礼に至るまで，あるいは弓組・持筒組・鉄砲組を支配して城内警備にあたる等，その職域は，広範多岐にわたっている。これらの目付職掌の内，重要，且つ大きな意味をもつのは，藩士，ならびに藩役人に対する監察役としての職掌である。

目付の監察職掌は，平時の場合と戦時の場合とに分けられるが，両者ともいずれも藩士の非違非曲の取り締まりを任としていることはいうまでもない。ただ戦時の場合は，さらに「戦始りては士卒の働を見届る事」註(1)，すなわち戦闘状況・将兵の勲功の監察が重要な役であった。

ここでは戦時を除き，主として平時における国許の目付の監察職掌を中心として触れてみたい。

藩士に対する監察を便宜的に次の３種に大別する。

1　一般的監察

2　出火時における監察

3　参勤時における監察

まず一般的監察については，藩役人の場合，目付は城中を巡視して諸役人の勤方の監察にあたっていたが，郡奉行・銀札場奉行等の，いわゆる藩主側近の役に就かない外様役人等に対しては，勤怠の有無を握みにくく，寛政12年12月以降，各役所は勤怠の有無を毎年12月に限り，月番目付まで報告すべきことが規定された。[註(2)]

士卒一般に対しては，一般作法，行状，衣服，乗物，養女，苗字改名等の違背の監察，忌服，産穢出郷ならびに他国養生，武芸方等の監視・監督にあたり，延宝９年特に須本詰藩士の一般作法・素行等の監察については，須本目付から国許まで「可然儀ハ可申達事」と命ぜられている。[註(3)]

この外一般士卒に対しては，犯罪捜査を管轄しており「将卒役令」によると，刑事の処断は「即中央に属する身分のものは目付に於て處分し」とある。[註(4)]

宝暦12年藩主重喜による藩政改革に際して，守旧者家老山田織部(貞恒)が，藩主呪詛事件を起した。直ちに目付高畠半太左衛門が「山田織部一件御糺御用ヒ仰付」と，その糺明を命ぜられ，又藩士の異死に対しても，文化７年５月以降，仕置家老の指示の下に目付，あるいは小目付が，異死人の格により検使を行うべき事が規定されている。この検使の格については，呉郷文庫本「寝覚草」によると「異死人検使御作法ハ，御小姓以上ハ御目附，其以下末々ニ至ル迄小目附検使之」とある。しかし小姓格以上であっても，目付が検使に赴くところ，かならず小目付が付き従っている。[註(5)]

さらに目付は，改易・暇・追放・閉門等の処罰者を監視統轄していた。[註(6)]

改易は武士の身分を剥奪され，城下外へ追放される刑であるが，この場合目付（２名）は，小目付２名を従え，本人帯刀で改易を申渡し，目付の支配下にある町目付に屋敷外まで監視させ，親類の内で引取人があれば，許可を与えて監視した。[註(7)]

暇の刑は禄を召されて，即日阿波淡路両国外へ追放される刑で，この場合目付（２名）は，小目付２名を従え，本人帯刀で刑を申渡し，町目付に命じて城下外まで監視させ，家族をも監督した。[註(8)]

追放は目付（２名）が，小目付２名を従え，本人無刀でこれを申渡し，町目付２名に命じて阿讃国境の大阪峠で，阿淡両国外へ追放した。[註(9)]

又閉門・蟄居等の謹慎刑にあってもその受刑中の監察を執り行なっている。[註(10)]

目付はこれら士卒一般に対する監察以外に，特に日帳格以上の無足武士について，跡式・勤功書・誓紙等の人事，ならびに養子縁組等について，その監察にあたっている。[註(11)]

ところで出火に対する防火対策については，幕府をはじめ諸藩とも，その対策に腐心しており，隣藩の高松藩の場合も目付支配下において火番役を設置し，火元監察に任じている。阿波藩においても火元の取締りに関しては，しきりに通達を発し，一般防火体制の強化をはかるとともに，城内火元の監察にあたっては，文政12年高松藩の火番役同様，目付支配下において徒士16名を城内専任の不寝番[註(12)]

ならびに火元見廻り役に任じ，城内防火対策の強化をはかっている。[註(13)]

この出火時における藩士の監察は，城内・出先機関，あるいは侍屋敷の出火に際して，出張した士卒の消火活動の監察と，警備にあたる場合が主たるものと思われる。寛政10年に至って鎮火後の引き取りについて，家老出馬なき場合は「出役之御目付え申談」の後，引き取る事が規定され，又享和2年から火事場へ出張した者の氏名を翌日，目付まで報告すべきことが規定されている。[註(14)]これら出火時における目付の取り締まり権については，中老・家老等に対してもその監察権が存在していたようである。[註(15)]

藩主は2年に一度，4月に参勤に赴き，翌年3月帰国をするが，目付はその参勤途上において，士卒の監察を勤める外に，関所通行の前段交渉，さらに享和3年以後，徳島・江戸とともに目付あるいは本〆が道中方を配下に置き，道中方を通じて人馬・宿所・小荷駄等の手配を管轄している。[註(16)]

これに対して，国許に滞在した目付の監察職掌については，目付の職掌が広範多岐にわたる上に，さらに参勤時においては，目付の人数が分断されるのであり，今仮に万治2年光隆参府の場合を例にとれば，国許に滞在した目付はわずか3名である。[註(18)]この3名の目付によって，どれほどの監察実効をあげ得たかについては，はなはだ疑問であろう。[註(19)]

次に須本目付と江戸詰目付の職掌について多少触れる。両者はともに国許の目付同様，その主な職掌は，ほぼ士卒・藩役人に対する監察であるが，須本目付については，国許目付と異なる面を持っている。

延宝9年6月，藩主綱矩から須本目付に下げられた「須本横目者共ニ被下　御書附」によると，その職掌は須本詰藩士の非違の監察を掌どり，一方須本城下庶民の公事訴訟の処断と，監察をも命ぜられている。[註(20)]したがって須本目付の職掌は，国許のそれとは違って，藩士の監察以外に城下庶民の監察権をも有していたことである。すなわち須本目付は，町奉行と兼帯であり「将卒役令」にも「古くは御目付，町奉行兼役」とあり，須本町奉行と兼帯であったことが判明する。しかしその兼帯の時期の下限については定かでなく，そこでその手がかりとして「阿淡年表秘録」から須本目付と，町奉行兼帯者数を示すと，次表となる。

年号	明暦	万治	寛文	延宝	天和	貞享	元禄	宝永	正徳	享保	元文	寛保	延享	寛延	宝暦
兼帯者数			3	1	2					1			1		

延享年間以後，須本目付と町奉行兼帯の記事は，まったく見られない，おそらく兼帯の時期の下限については，延享年間ごろ迄という手がかりを与えていいのではなかろうか。すなわち須本目付は，町奉行と兼帯であったため，江戸時代前半までは，士卒一般の監察とともに，城下庶民をも統轄していたことが国許の目付と異なる点である。しかし国許の目付も監察配下の町目付をして城下庶民の監察にあて，管轄をしているもの，あくまでも全般的な城下の監察権は徳島町奉行の手にあり，主として町目付を法度遵守状況の監察にあてたにすぎない。

寛文7年5月藩主綱通から，江戸の下屋敷横目牛田又右衛に下げられた「下屋敷横目申付覺」によると，江戸詰目付の職掌が掲げられている。[註(21)]主として江戸詰の上下藩士・鉄砲組・門番に至る一般士卒の行状・出邸・法度遵守状況の監察，ならびに火元監察等である。[註(22)]特に非違の監察にあっては，参

府中に報告すべきこと，火急の場合は国許へ報告すべきことが命ぜられている。

このように阿波藩における目付は，士卒あるいは藩役人の非違非曲の監察を任とする以上，自然目付自身に対してもその勤務態度・生活態度の厳正さを求められている。それでも勤方宜しからず，粗忽等の理由により処罰されている事実も応々散見されるが，もともと目付の役は「存旨等外え不相拘，一分立候役筋」[註(23)]であり，したがって勤務にあたっては，諸事評議・申談を加え，仕置家老に対しても「難心得義は打返申出，幾重も談合」[註(24)]すべき事を命ぜられている。そして生活態度に至っては「其方とも役義柄之事ニ候得ハ，猶以行儀作法之義，猥ニ無之様日夜相心懸」[註(25)]「身分平日之行作等，屹と正敷可被相守」[註(26)]等と，目付はその職掌柄，忠実に職責を全うし，生活態度についても厳正さを求められることが少なくなかった。[註(27)]

目付は頭初より，主としてこれら監察という重要，且つ定められた職掌の外に，時代が下るに従って臨時的に，しかも多岐にわたる職掌を命ぜられている。

「阿淡年表秘録」から徳島目付に命ぜられた臨時的職掌を掲げると，若君の誕生御用・後見，藩主葬礼御用，それに伴う霊屋(祠廟)普請，関船建造御用，藩主一門の湯治・出棺・入輿御供(警固役)，異国船警備等，広範多岐にわたっている。これらの職掌はすべて元禄以降に命ぜられたものであり，それ以前においてはまったく見られない。その内一部は，文政年間に至って，祠堂・墓域，ならびに寺島学問所・医師学問所の管理を全目付の下に職務化されている。[註(28)]したがって目付の職掌は，時代が下るに従がって目付本来の職掌の外に，臨時的職掌を命ぜられ，[註(29)]そしてその一部は恒久化され，付加的職掌として加えられていることを知る。

註(1) 「将卒役令」

(2) 阿波藩における目付の勤務体制は，月番制と宿番制である。月番制は他の要職や高取武士の務める各様奉行同様，若干名がその月の業務に当たり，責任を負う交替制である。この月番交替制は，古参の者あるいは一人の独断専横を制するためのものであったろうが，一面非能力的，且つ煩雑さがあったことは否めない。

(3) 「藩法集　諸御役場雑」寛政12年12月20日の条

(4) 呉郷文庫本「藩署紀聞」上巻

(5) 藩主重喜の藩政改革に対し，仕置家老の職にあった山田織部が改革中止の諫言を上書したが入れられずかえって恕りをかい，排斥された。織部は重喜から排斥されるのを残念とし，沖浜村にある歓喜院に依頼して，藩主重喜を呪咀させた藩主弑逆事件である。（岡田鴨里編「蜂須賀家記」明治９年刊）

(6) 「阿淡年表秘録」宝暦12年４月29日の条

(7) 「藩法集　御国中御家中」文化７年５月20日の条

(8) 「藩法集　御年寄並御用人，奥御小姓」文化１年10月19日の条

(9) 「前掲」

(10) 「前掲」

(11) 「御年寄並御用人，奥御小姓」所収，蜂須賀伊豆宛，賀島和泉書状によると，閉門・蟄居中において出火があれば，目付が駆け付け，状況により退出させるが，止むを得ない場合は，隣家人が退出させる。この場合は目付から隣家人に対し，あらかじめ連絡を取っておくこと等，目付の任務が報告されている。文化３年の規定では，受刑中において近火・自家が偶発的に起った場合は，自ら退出できたようであり，その場合本家の親類から目付まで報告すべきことが規定されている。（「御国中御家中」所収，『御家中別家厄介本家御咎被仰付候節取扱心得一巻』）

(12) 福家惣衛氏著「香川県通史」昭和40年　高松上田書店

(13) 「藩法集　御城内諸役処御番処共」文政12年12月29日の条

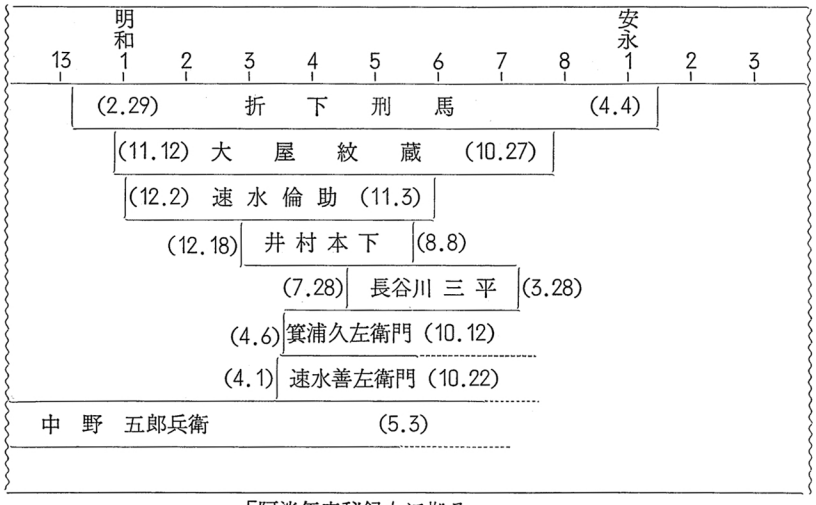
(14) 「御国中御家中」寛政10年12月27日の条

(15) 「前掲」享和２年10月15日の条

(16) 「前掲」享和１年８月19日の条によると，内町出火の際，家老蜂須賀駿河・中老蜂須賀出羽・同大和の３名が藩主拝領の紋付提灯等を公私のわきまえなく使用したことにより，仕置家老から目付に対し，今後使用すべからず旨の申入れを指令されている。

(17) 「藩法集　旅一巻出郷加扶持方共」享和３年３月29日の条

(18) 阿波藩における目付の人数については，幕末まではほぼ８名であったようである。すなわち宝暦４年の文部省史料館所蔵「諸御役人帖」（『徳島県史』３巻所収）によると，全目付と思われる８名があげられ，明和４年７月には少なくとも最低，徳島目付８名が次の在任表により確認される。



「阿淡年表秘録」に拠る

さらに近世末期のものと思われる「阿淡両国高取名面帳」によると，徳島目付８名，須本目付１名の計８名が記されている。これが幕末に至ると，安政年間には恐らく全目付であろうが，12名に増加している。（露木亀太郎編「嘉永阿波藩士分限帳」昭和12年）

(19) 「阿淡年表秘録」によると，赤川七郎兵衛・尾関九右衛門の２名に団市郎左衛門が加えられている。

(20) 「藩署紀聞」上巻

(21) 綱通，時に12才，後見人は叔父の蜂須賀隆重である。

(22) 「御大典記念阿波藩民政資料」上巻

(23) 享保14年樋口与次兵衛が，勤方宜しからずとして逼塞を命ぜられ，宝暦12年速水善左衛が，手落ちにより憚，明和５年井村本下が，勤方宜しからず閉門，文化７年若山六十郎が，粗忽により閉門を命ぜられている。（「阿淡年表秘録」）

(24) 延享４年６月４日付，目付宛趣意書（「御年寄並御用人，奥御小姓」所収）

(25) 安永７年７月18日付，本〆・目付宛書状（「藩法集　御家老並御仕置処」所収」

(26) 「前掲」

(27) 文化10年１月20日付，三田屋敷目付・国許目付宛覚書（「藩法集　江戸」所収）

(28) 元禄以降に命じられた臨時的職掌件数を「阿淡年表秘録」から示すと次のようになる。

元禄	宝永	正徳	享保	元文	寛保	延享	寛延	宝暦	明和	安永	天明	寛政	享和	文化	文政
2			1			1		2	2		3	2		1	1

(29) 「御年寄並御用人，奥御小姓」文政７年８月24日の条，文政12年10月４日の条

3 下部組織

阿波藩における監察組織の大要は，まず城下の場合は，町奉行ならびにその支配下である町手代・町同心・目明し・町年寄・番非人あるいは町目付等が監察に当たり，地方にあっては，一時国奉行が管轄[註(1)]した時代もあるが，江戸時代全般を通じては，郡奉行（郡代）ならびにその支配下である郡手代・郡同心・郷目付等がこれにあたり，時には臨時的に鉄砲之者数名を地方に派遣し，監察させたこともある。各役所については，巡行目付[註(2)]がこれにあたり，個々の役所については，特に裁許所には裁許目付[註(3)]が，銀札場には銀札場目付が派遣され，これら個々の役所の諸事監察を執り行なっていた。この外[註(4)]，個々の役職に対する監察役も設置されており，藩主側近に仕える小姓役の監察を務める側目付，城内・藩邸の奥女中に対する奥目付，安宅役所の卒に対する安宅下目付，行列時の卒に対する供目付，江戸藩邸の人足に対する勘略目付，あるいは藩有林の監視に当たった林目付等が設置されている。

これを他藩と比較してみると，盛岡・小田原両藩には阿波藩同様の側目付が設置されており，一関藩には阿波藩巡行目付に類似する役所目付が認められ，伊達仙台藩には林目付に類似する林横目が設置され，又熊本・仙台両藩の村横目，あるいは一関藩の郡横目，岡山藩の郡目付に相当する役に阿波藩の郷目付が設置されている。一方，幕府あるいは仙台・盛岡・一関・大垣・和歌山・岡山・薩摩その他各藩において，多くの設置がみられる徒目付（徒士目付，歩行横目）については，阿波藩においては，まったくその存在がみられない。したがって阿波藩の監察組織の内，他藩と類似する面もあるが，差異もみられる。この事は阿波藩のみに拘わらず，諸藩の制度においても同様である。もともと諸藩の政治機構はもとより，監察機構においても幕府に倣って制度化した事は否定できないが，それが各藩の事情により幕府の統制機構に倣って各藩独自の機構を創りあげたのであり，各藩において相違があったことは当然である。

目付の下部組織である監察組織としては，小目付・町目付・伊賀士があげられる。この外，単なる下部組織としては，徒士・弓組・持筒組・鉄砲組が付属しているが，これらは目付配下の単なる下部組織であって監察組織ではない。ただ監察配下として，徒士の中から城内不寝番ならびに火元見廻り役に命ぜられたり[註(5)]，あるいは弓組の一部が町目付役をほぼ構成したり，弓・持筒・鉄砲組の一部が町目付に繰り入れられた[註(6)]時代もあるが，その数は全体からみると，わずかであり，徒士・弓・持筒・鉄砲組は，あくまでも目付がこれら一部を預って支配するだけの単なる下部組織であり，監察配下ではない。ここでは主に目付配下の監察組織について触れることにする。

目付の監察配下の内，目付の指令の下にもっともよくその手足となって働いたのは小目付である。

小目付の役は，寛永9年2月すでに存在しており，その時の職掌も陪卒の監察にあたることが規定されている。人数については「将卒役令」によると，中小姓格の武士12人が命ぜられていたようであるが，寛文8年新蔵奉行の願いにより，1名が新蔵勤務を命ぜられ，宝暦4年の「諸御役人帖」には13名があげられている。しかし文化7年頃には人数が減少しており「藩法集」によると，「小目付・御日帳役御人減相成ニ付ては」とある。これが幕末に至ると，安政年間には12名となっている。したがって小目付の人数については，時代により多少異同があるが，江戸時代全般を通じてみると，その定員はほぼ12〜13名であったことがうかがわれる。[註(7)]

この小目付の職掌の大部分は，監察役としての職掌である。役所の監察にあっては，元禄５年から藩の米麦貯蔵庫である新蔵・北蔵，後に長蔵にも派遣され，三蔵役人の勤怠の有無の監察を行なっていたが，翌６年11月には「向後彼是一切善惡之趣見屆可申上旨」との規定が行なわれ，勤方の監察のみならず，これら御蔵所の業務そのものの監察をも規定化されている。しかしこの制度も寛政12年に至って「新御藏・長御藏共只今迄小目付之面々罷出來候處，此節罷出ニ不及旨」の規定ができ，新蔵・長蔵に対する全般的な監察制は，一部を除いて以後廃止されている。[註(8)][註(9)]

藩士に対する監察は，目付の場合と同様，その指令の下に「御家中善惡之品御作法等」の監察にあたり，報告は「御目付え申出義，勿論有來通可被相心得候」と命ぜられている。[註(10)][註(11)]

ところで藩士の養子縁組の規式については，しきりにその分限を守る旨の通達が出され，違反者の摘発には目付以下，小目付・町目付等があたっていたが，延宝８年３月に至って，小目付に対し，縁組（養子の場合）時の調度品の検分改めが次のように規定されている。[註(12)]

一，婿取之節娘持參之長持，家老ともハ七ツ，千石以下は三ツ，可應其分限，道具衣類等ニ至迄下横目乞請見セ可申事。

したがって婚礼時の調度品に対する小目付の監察権は，家老に至るまでその職権が存在していたようであり，後世の憲兵の如き存在であったことがうかがわれる。[註(13)]

この外小目付は，出郷の諸奉行に付き従って監察にあたり，あるいは目付の指令の下に士卒の異死等に対する検使を行なっている。

士卒の異死については「寝覚草」に小姓格以上は目付が検使を行ない，それ以下の場合は小目付が検使を行なうことが記されている。しかしたとえ異死人が，小姓格以上であっても目付に付き従ってこれの手足となって補助を務め，あるいは改易・暇・追放等の刑の申渡しにも付き従っている。文化１年の規定では，改易人の異死があれば，小目付が検使に赴くことが規定され，又陪臣・女中の異死の場合も「寝覚草」に「御目附ヨリノ検使ハ，小目附タルナリ」とあり，目付の指令の下に小目付が検使を行なっていたことが判明する。そしてこの検使の結果，犯罪が替んでいれば当然捜査が開始されたことはいうまでもない。[註(14)]

小目付はこれら士卒一般に対する監察役の外に庶民の検死等についても管轄している。「藩法集」によると，貞享３年「一宇山之罪人共於貞光村死罪就被仰付，爲見屆御下横目高瀬孫作被遣候」とあり，死罪検死のため在郷に派遣されている。又元禄15年にも「今月九日科人磔罪斬罪被仰付候ニ付，場處え下横目三人可被申付旨」の通達が，用人から目付に対し与えられた。しかしこの時小目付の多くは在郷出張，あるいは病気等のため３名が残留しているのみで，その内２人までが火急の用により城中滞在をよぎなくされている旨の回答を受取った用人は，評議の結果，目付に対し残り１名の小目付と，伊賀士２名を死罪検使に派遣すべき事を命じている。[註(15)]

さらに小目付は，無礼打ちによる庶民の検死も臨時的に務め，拷問の立合いも務めている。拷問は牢屋敷において，拷問小目付立合いの下に行なわれていたが，寛政12年４月以降市郷奉行の管轄となっている。しかし「藩法集」によると，この立ち合い以外について，寛政12年以降も「牢屋敷ニて之節ハ只今迄之通たるへく候事」とあり，恐らく牢屋敷の巡視と囚人の監視等にあたったものと思われる。[註(16)][註(17)]

この外小目付は，臨時的に飢饉の調査を命ぜられている。「阿淡御条目」[註(18)]によると，

三好郡昼間村御蔵入百姓男女九拾弐人飢ニ及申旨，庄屋５人ゟ面付帳を以申出ニ付，御代官山川清右衛門壱所ニ正徳四年二月十八日御当職方へ相伺ヶ所，有来通御改被仰付旨ニ而，小目付川田又之丞被遣ヶ付，両下代共指遣相改ヶ処（下略）

（ママ・組脱カ）（ママ・ニ脱カ）

とあり，三好郡昼間村の蔵入百姓の飢饉調査を２名の郡下代と共に命ぜられている。その結果，川田又之丞によって百姓92人の内，29人が極飢人であり，内４人が夫役人，残り25人が無役の男女であることが仕置に報告された。これに対し藩は，４人の夫役人に対し，35日間に限り１日米1.5合宛，他の男女にについては，１日１合宛の御救米を与えることになった。したがってこの小目付の検察による影響力が多分にあった事は否定できず，小目付の果す役割は以外に大きかったことがうかがわれる。[註(19)]

この小目付に対し，目付配下の内で最もよく機密監察にあたったのが伊賀士（者）である。その起源については「将卒役令」に「當御家の伊賀者は，元雲州堀尾山城守彼に仕彼家斷絶ニ付，生駒讃岐守殿へ仕へ是モ斷絶ニ付，天庸（忠英）様御代御当家へ來リ……」とある。したがって伊賀士の起源は，出雲・隠岐23万石を領していた堀尾氏松江藩お拘えの忍者に由来する。その後高松藩を経て，２代忠英の代に阿波藩を頼って来た忍者をいかなる大功があっても，立身させない約定の下に徒士格に組入れたのが伊賀士である。その後においてもこの約定が根本方針であったが，５代綱矩頃には本職外で多大の勤功があった者は，日帳格，そして伊賀士では最高の中小姓格に立身している例がみられ，嘉永２年の「分限帳」では，中小姓格の伊賀士４名があげられている。[註(20)][註(21)]

伊賀士の職掌は，あくまでも隠密探索という伊賀役であり，平時は他藩の武器・城塞等の内情探索，あるいは犯人の探索等の機密活動に従事し，戦時にあっても忍の技をもって敵状探索にあたることを任務とする。しかしこの伊賀役は，あくまでも臨時的職掌であり，平時にあっては参勤途上時における本陣の不寝番を任務とし，あるいは元文３年から次のように勤務化されている。すなわち「八人之者共四番ニ〆，日々貳人宛内壹人は御城え相詰，同壹人は御仕置頭人月番宅え可罷出候」[註(22)]

これら小目付・伊賀士と違って，目付配下の内で専任の市中監察に当たったのが町目付（宝永２年２月，町横目を町目付と改称）である。[註(23)]

町目付は主に弓組の者から任ぜられるが，人数については時代により異同がみられる。明暦３年６月10日の「覚」[註(24)]には「右之通町横目拾貳人ニ外ニ拾人御加え貳拾貳人廻シ候様」とあり，町目付12人の外に臨時的に10人を増員して22人で構成したが，寛文11年７月８日の「覚」[註(25)]によると，すでに旧に復している。元禄10年倹約令発布とともに，遵守状況監察のため１月28日に至って６人増員して18人で構成している。この外，享和３年の「目付申出状」[註(26)]によると，目付支配下の鉄砲組から３名を当て，あるいは文化７年まで弓・持筒・鉄砲組から６名をあてた時代がある。したがって人数については異同がみられ，定まった員数は見られない。ただ元禄10年１月28日までは，町目付の定員は12名であったようである。[註(27)]

町目付の職掌は，明暦３年７月山田豊前から町目付に与えられた「町横目勤之覺」[註(28)]に示されており，城下一般庶民の素行監察を執り行なうことを命ぜられている。もちろん市中警備をも任としたことはいうまでもないが，殊に町目付に対して，法度遵守状況の監察にあてていたことは次のことにより判

明される。延宝９年長谷川主計から町目付に与えた「覚」[註(29)]に，「從先年被仰出御法度書付之趣，並山田豊前書付を以被申渡通，今以彌可相守候」と命ぜられ，後元禄７年７月，宝永３年２月の２度にわたり同様の命を受け[註(30)]，又寛延４年にも賀島出雲から「寶永三年二月七日書付之通」[註(31)]と，４度にわたり仕置から命ぜられていること，あるいは享和３年「御制禁の衣類を始，惣て御法度之義，万一猥成義有之候ハハ，屹と相咎可申」[註(32)]と命ぜられていることにより判明される。そしてこの違反者に対しては「若及異儀は打捨可仕事」[註(33)]とか，禁制の絹布買売の監察にあたっては，随次検索を行なうこと等を命ぜられている。そしてこれら城下の監察にあたっては「昼夜無油斷相勤可申」[註(34)]と命ぜられ，目付まで報告すべきことが規定されている。

この外町目付は，市中における一般士卒の素行の監察にあたり，目付に報告すべき義務を持つ。

以上，阿波藩における目付配下の監察組織について触れてきたが，これを他藩の目付あるいは横目配下の監察組織と比較してみると，かなりの相違がみられる。このことは他藩の場合も同様で，各藩の事情により多種多様である。例えば熊本藩の目付と，その下部にある横目は大目付に属せず，奉行配下にあって，命令系統を異にし，一面紀州藩のように，幕府の制度と類似していること等，諸藩により多種多様である。盛岡藩の場合，大目付配下に寺社町奉行・表目付・側目付・武具奉行等があり，表目付の配下に目付が設置され，さらにその下部に同心頭・徒目付・与力等を設置し，監察・検察を要するものは一応大目付の配下に置かれている。したがって盛岡藩の監察制度そのものは，非常に一本化されているが，阿波藩においては盛岡藩[註(35)]のごとく，組織の一本化ということはみられず，士卒あるいは一般城下庶民に対する属僚を置いているにすぎない。大垣藩の場合，主に上・中士の監察に当たる大目付が設置され，その支配下に下士に対する詰目付，歩行に対する歩行横目，そして足軽横目と，それぞれ監察対象が別れており，士卒に対する監察組織が充実している。これに対し阿波藩には歩行横目，足軽横目の存在が見られず，士卒に対しては，目付あるいは小目付・町目付全体がこれに当たり，大垣藩のごとく士卒の格によって，目付あるいは横目の監察対象が異なっていたということはみられない。

註(1) 徳島県警察史編纂委員会による「徳島県警察史」では，町同心と町目付とが混同されている。あくまでも両者は別個であり，「藩法集　市郷」天保２年２月28日の条に，町目付と町同心の服務に触れ，「已後之儀は町目付並町同心共入交リ見咎候様被仰付度事」（傍点筆者）とあり，同一のものではない。

(2) 「藩法集　郡方」

(3) 一関藩の役所目付は，目付に付属しているが，阿波藩の巡行目付は目付に属せず，仕置あるいは本〆の配下であったようである。武器・調度・藩有地域の各管理役所，会計出納，建築土木，城下地方の司法行政機関，専売統制機関等，中枢機関を除いてほぼ全般にわたる役所の監察を務めている。

(4) 天和２年２月１日付，家老賀島主水宛，長谷川主計書状（「藩法集　裁許処」）によると，「裁許御横目役向後横目之内より，廻り相勤候様」とあるが，後奏者又は使番が兼帯している。

(5) 徒士は享保７年まで目付がその支配頭を兼帯し，支配していたが「彼是御用繁ニ付」（「藩法集　御徒士伊賀者」）との理由により，以後奥小姓が支配頭となった。弓・持筒組は，目付又は奏者がそれぞれ一部を預って支配し，鉄砲組は本〆・目付等が支配している。

(6) ４人詰４番交替で，夕七ツ時（４時）に出勤して城内を巡視し，早暮より下焚火之間に２人が不寝番として詰め，非常の際は直ちに宿番の目付まで報告し，異状がなければ，翌朝巡視時間と巡視者名を目付まで報告した。（「藩法集　御城内諸役処御番処共」）

(7) 「嘉永阿波藩士分限帳」所収「付諸旧記」

註(8)　「藩法集　新御蔵北御蔵」元禄6年の条
(9)　「前掲」寛政12年12月18日の条
(10)　寛政12年後においても，貢納時の監察，年貢米の出目・缺・不良米の検分等を行なっている。（「諸御役場雑」天保3年12月14日の条，「新御蔵北御蔵」寛政12年12月18日の条）
(11)　「御城内諸役処御番処共」元文4年の条
(12)　「前掲」
(13)　「御国中御家中」延宝8年3月18日の「定」
(14)　「御年寄並御用人，奥御小姓」文化1年10月19日の条
(15)　「御城内諸役処御番処共」元禄15年11月8日の条
(16)　「前掲」
(17)　「藩法集　市郷」寛政12年4月13日の条。町奉行・小目付の外に町同心も犯罪捜査に関係している以上，「藩署紀聞」坤によると「拷問人有の節，貳人（町同心）宛罷出候」とある。
(18)　徳島県史編纂委員会編「徳島県史料」2巻所収，昭和42年
(19)　「阿淡御条目」
(20)　蜂須賀家政を藩祖とするか，あるいはその嗣子至鎮を藩祖とするかどうかについては意見が別れるところであり，それによって忠英の代数の数え方も異なってくるが，これは本稿の任務外であるから省略する。ただ「藩」そのものの存在は，江戸幕府成立以降であり，そのことを考え合わせてみれば，秀忠から阿淡両国大守に封ぜられた至鎮を初代とすべきであろう。
(21)　「将卒役令」によると，森脇新右衛門・村上文平・坂田与四右衛門・梅岡六郎右衛門が日帳格に立身しており，その他須本の伊賀士も日帳格に立身している。
(22)　阿波掃苔会編「徳島藩御家中鳥分々限調帳」徳島市立図書館刊
(23)　「御徒士伊賀者」元文3年8月22日の条
(24)～(26)　「藩法集　諸配下雑」
(27)　「御年寄並御用人，奥御小姓」文化7年4月4日の条
(28)～(34)　「諸配下雑」
(35)　「岩手県史」5巻近世篇Ⅱ

お　わ　り　に

阿波藩の目付は，広範多岐にわたる職掌を有しながら，殊に藩士あるいは藩役人の一般素行や勤方の監察という重要，且つ根幹をなす職掌にあたったが，この監察の結果が処罰の対象となり，あるいは「賞罰御政道の本」（「将卒役令」）となったことはいうまでもない。そのため火事場において，家老といえども非違があれば申入れを行なったごとく，かなりの職権をその一部に有し，士卒一般に対しては後世における初期憲兵のごとき存在で，秩序の維持・確立にあたり，あるいは現状警察組織における監察官的存在でこれにあたった。そしてこの監察実効をあげ得るために，城中においては主に監察配下の小目付をしてこれにあたらせ，市中においても，町目付あるいは小目付をして士卒全般の一般作法・行状の監視にあて，又時には伊賀士という忍を放って機密探索にあてたこともある。

一方，城下庶民に対しては，監察配下の町目付をして特に中央藩庁から発令された法度遵守状況の監察にあて，「惣て御法度之義，萬一猥成義有之候ハハ，屹と相咎可申事」と厳命し，違反者の検索にあたっては昼夜ともこれにあて「若及異儀は打捨可仕事」とあるように，全盛時の憲兵のごとき権限と威力をもって一般城下庶民の監察にあたらしめた。

このように阿波藩における目付の監察組織は士卒一般，藩役人，ならびに城下一般庶民に対する監察組織の三者が根幹をなす。

鳴門市大麻町谷口山の組合式箱形石棺と徳島県内の組合式箱形石棺について

立　花　博

1．はしがき

この組合式箱形石棺は，昭和41年1月12日，土地所有者の谷口豊氏が盆栽用の松を採取中，偶然地中より蓋石を発見し，県教育委員会に届け，その依頼をうけてただちに調査したものである。

2．位置と考古学的遺跡環境

(1) 地理的位置（図1）

石棺の発見された谷口山は，鳴門市大麻町桧35番地にある。

大麻町は，徳島市の中心より北西約12キロメートルの距離にあり，北は香川県と境をなす讃岐山脈南は吉野川の旧河道にはさまれ，東西に開けた沖積平野が大半を占め，古来より農業のさかんな地域である。また吉野川の北岸を東西に結ぶ交通の要所でもあった。この大麻町の西端で，西に隣接する板野町との境をなす尾根が谷口山で，この近辺を桧とよんでいる。

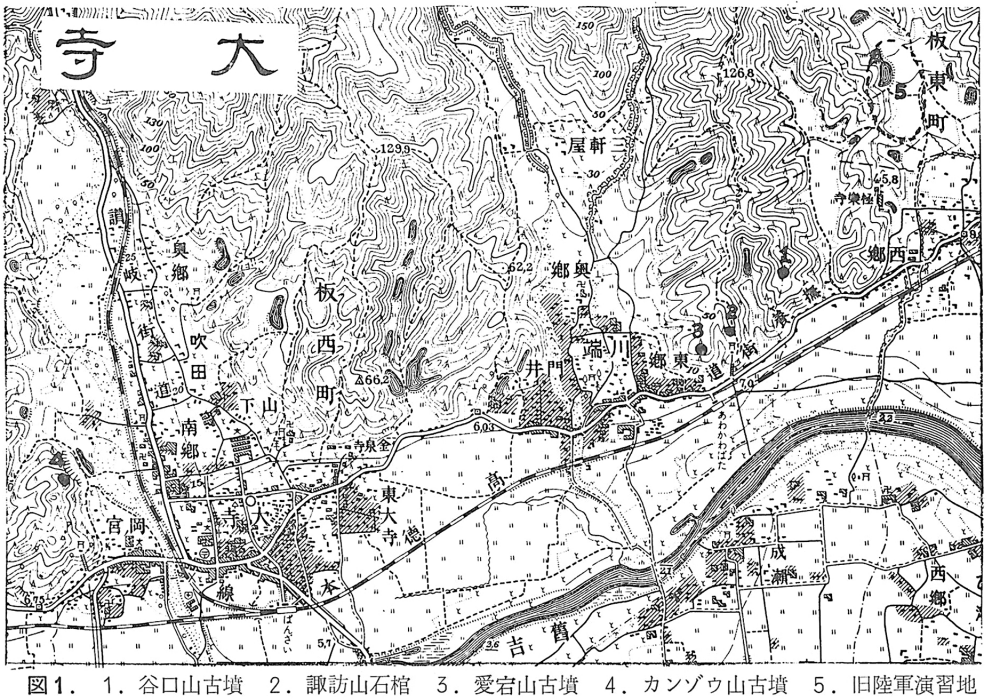


図1．　1．谷口山古墳　2．諏訪山石棺　3．愛宕山古墳　4．カンゾウ山古墳　5．旧陸軍演習地

(2) 考古学的遺跡環境

縄文文化時代の遺跡の確認はまだされていない。弥生文化時代の遺物の一つである銅鐸が，この谷口山のすぐ東の谷の西谷から出土したといわれている。古墳時代の遺跡は多く，すぐ西の隣接尾根の

頂部に数基の古墳があり，またその西に隣接する尾根先端頂部には，本県の代表的前期古墳の一つである愛宕山古墳がある。谷口山の東方には，萩原古墳（横穴式石室），天河別神社古墳，宝憧寺山古墳（前方後円墳）などが山麓一帯にならび，その間にもいくつかの古墳が点在している。また，谷口山の東隣の極楽寺山の東麓一帯は，旧陸軍演習地であった。その谷にのびる小舌状丘陵地には，多くの組合式箱形石棺の存在が知られていたが，今ではすべて破壊されてしまったといわれる。このように，大麻町を中心とした一帯は古墳が多く，県内の中でも古墳分布上最多密地の一つであるといえる。歴史時代に入っての遺跡も布目瓦の出土がみられ，寺院址と推定されているところもある。このように古墳時代以降の遺跡の多い中に谷口山の組合式箱形石棺が位置づけられる。

3．埋　葬　施　設

この組合式箱形石棺は，谷口山の頂上から南に下がる斜面に設けられたものである。

(1)　外　　形

封土状のものは，全くみられず，外観は，頂上からさがる比較的急な自然の傾斜面としか見えない場所にある。

(2)　埋葬施設

比較的急な斜面の地表下（約50㎝（N）～約40㎝（S））に地山に達する土坑を設け，結晶片岩の板石を用いて石棺を構築しており，これを被護すると考えられる特別な遺構は見あたらなかった。

(3)　石棺の構造

・蓋　石

長さ40～50センチメートル，幅約20～40センチメートルのほぼ長方形に近い形で厚さ10センチメートル内外の緑色片岩の板石を，棺の長軸（E－W）に対して直角の方向に９枚で棺を覆い，西端部の２枚は二重となし，それぞれの蓋石のすき間は，小さな板状の石をのせたところもあり，小さい間隙には粘土を用いてふさぎ，また中央は，長軸と同方向に３板の板石を用いて二重にしてあり，蓋石は綿密なつくりといえる。蓋の最長部で210センチメートルあった。

・長側石と短側石

石材は，蓋石と同様に結晶片岩（緑色片岩と紅簾片岩を併用）を使い，南の長側石は６板の板石，北側は５板の板石で，縁の整った側を上縁にして剥離方向を横に，平つぎに並べたてて石棺を構築している。しかし，南の長側石のうち２枚は剥離方向を縦に用い，重ねつぎにしてある。これは上縁を整えるためであるとみられる。短側石は，それぞれ東・西に１枚ずつを用い，長側石内にはさまれた構造であり，全体的に形態はいびつであり，精巧な構造とはいえないが，長側石の上縁は，きわめて整った組合式箱形石棺である。内法の長さは北側で179センチメートル，南側で172センチメートル，幅は東端上部で40センチメートル，底部で43.5センチメートル，西端部上縁で35.5センチメートル，底部で37センチメートルあり，東端部および底部が僅かに広い。深さは25センチメートルでこれらの石棺としては比較的浅いものである。長短側石および蓋石には，石材を加工した痕跡もまた赤色顔料

の塗布も認められない。

• 石棺内の構造

石棺底は，地山（頁岩層）の上に約５センチメートルの厚さで粘土を敷き，その上に，厚さ１～1.5センチメートルの簿い小板石を20数枚使って一重にすき間なく敷きつめ底石としている。東の短側石に接して，約５センチメートルの一様な厚さをもち，平面がほぼ台形の石を置き，石枕としての役割をさせている。この石枕には加工の痕跡はみられず自然石である。

遺体は，頭を東にし，石枕にのせ，伸展した状態で葬られており，頭骨の後頭部，下顎骨，上膊骨大腿骨の一部が残存していた。人骨は未鑑定である。

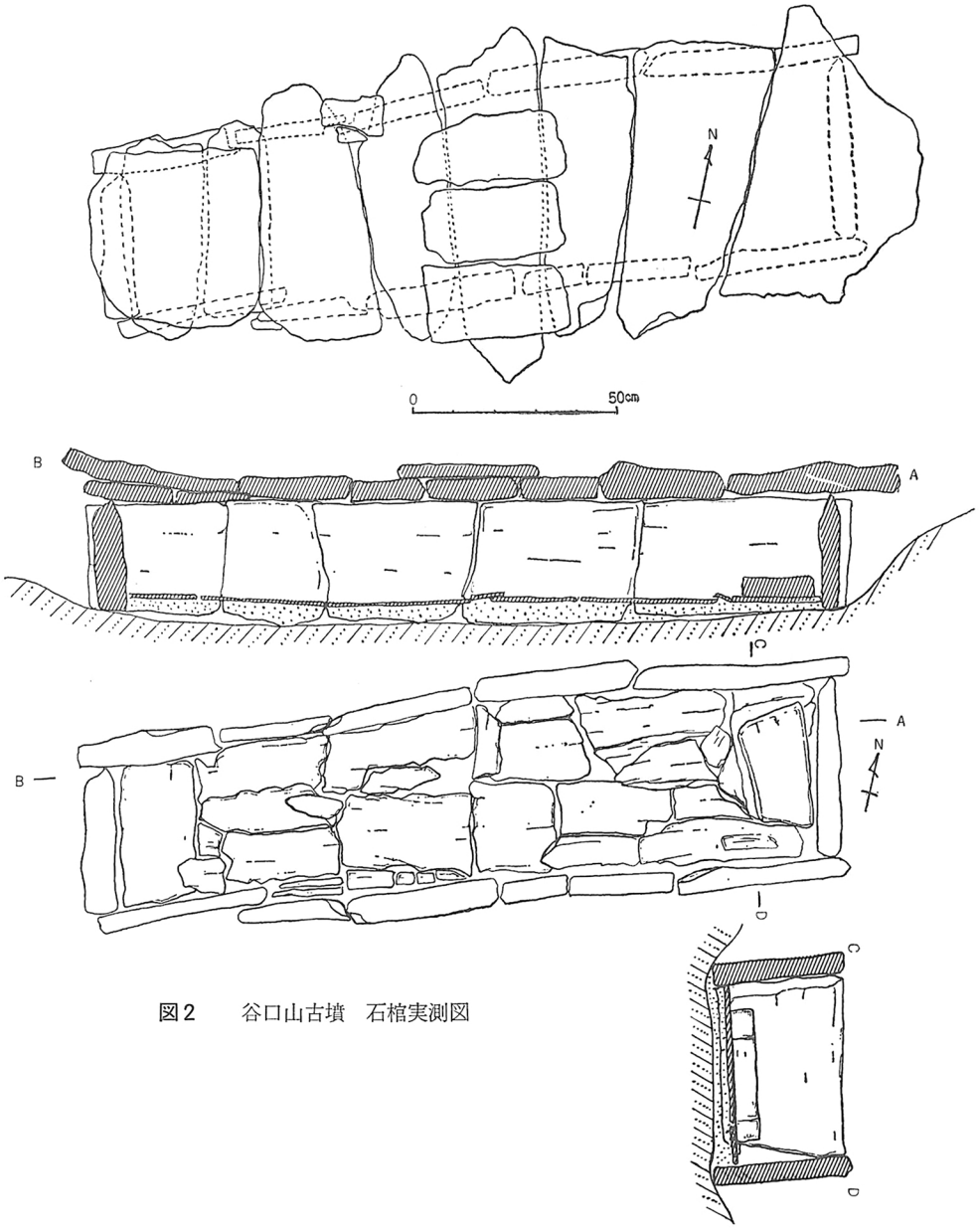


図２　谷口山古墳　石棺実測図

4。副　葬　品

石棺外に副葬品は見られず，棺内に次のものが納置されていた。（図３）

刀子　　1

大刀　　1

（刀子）　棺内東端に近い位置，すなわち遺体の左肩にあたるところで，鋒を外に向けて納置されていた。

刀子は，全長11.1センチメール，そのうち4.3センチメートルは柄部で，この部分は，鹿角によって装具したものである。身部は，刃の部分が身の幅の半ばまで腐蝕欠損し，長期にわたって使用したものを納置したと考えられる。棟の厚さは，0.6センチメートルある。

（大刀）　大刀は，棺の西短側石から20センチメートル，南長側石から５センチメートル離し，刃を内に向け，ちょうど佩刀したような状態で納置されていた。

大刀は，全長は91.8センチメートルあり長い大刀である。そのうち，17.5センチメートルは茎で，茎先から9.7センチメートルほぼ茎の中央に目釘孔が一孔穿たれている。茎の両面には，木質の腐蝕残片が付着しており，木装の大刀であったと思われる。刀身部身幅3.5センチメートル，棟の厚さ0.8センチメートル，無反り，平棟，平造りの鉄製の大刀である。鞘部は，明らかではないが，木装であったと考えられる。

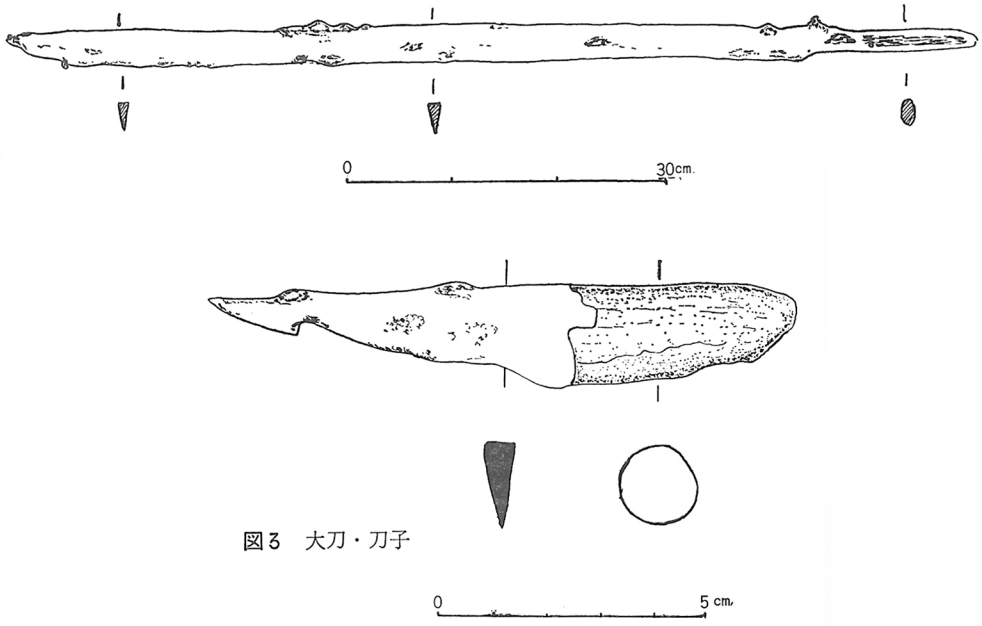


図３　大刀・刀子

5。考　　察

以上，谷口山の組合式箱形石棺について，その外形，埋葬施設の構造および副葬品について略述してきたが，本県内には，これらの組合式箱形石棺は多く知られている。それらを総合的にとらえながら，時代性，地域性を考えていきたい。

(1) 本県内の組合式箱形石棺の調査

埋葬施設としての組合式箱形石棺の存在ははやくから知られ，明治時代には〝徳島近傍七ツ山及び丈六山ノ石棺〟[註(1)]〝徳島近傍の石棺〟[註(2)]の報文がみられる。これらの報文によれば，七ツ山の古墳の埋葬施設は，箱形石棺であり，短側石は，長側石の外側からあてがったものであり，しかも，それぞれ2枚を平つぎにした特殊な構造の組合式箱形石棺であった。また丈六山の石棺の1つは，長側石と短側石を枘組みにした精巧なものであり，他の1つも，1枚の底石上に長・短側石を組み合わせた石棺であったことが記されている。また，箱形石棺の調査に基づき構造の分類も試みられている。

大正年代にはいり，笠井新也氏の〝阿波式石棺〟の提唱を機に喜田貞吉博士との間に，その呼称をめぐって誌上討論が行なわれたことがあった。このことが今にいたるまで，〝阿波式石棺〟の名で呼ぶ人があるのも，この論争が大きな影響を与えたことがうかがわれる。[註(3)]

昭和年代にはいり，板野郡板野町の〝カンゾウ山古墳〟[註(4)]名西郡石井町の〝石井町の石棺群〟[註(5)]の調査報告がなされている。〝カンゾウ山古墳〟は，その石棺内に直弧文様のある鹿角製の刀剣と棺外に十数本の鉄鏃が副葬されていたこと，〝石井町の石棺群〟に石井町にある石棺の所在地とそのうちの一つである横林の石棺の調査が報告されている。

戦後になり，古墳の調査も進み，組合式箱形石棺の埋葬施設をもつ古墳の調査も「石井廃寺址」[註(6)]の調査の機に，近くの石井町内谷，利包の組合式箱形石棺，徳島市八万町の宅地造成工事に伴なう恵解山古墳(1～9号墳)の調査，[註(7)]名東町節句山古墳，[註(8)]名西郡石井町清成の土取工事に伴なう調査，[註(9)]同町尼寺の盗掘された古墳の調査[註(10)]また，紀淡・鳴門海峡地帯の考古学的学術調査，[註(11)]などによってその報告が次第になされるようになってきた。しかし，外部施設を伴なわなく，外観上特殊構造をもたないこれらの石棺は，明治，大正，昭和を通じ，開墾，土取・石取工事また近来の宅地造成などの土木工事によって破壊され消滅してしまったものも数が多い。これらは古老の話から察知することができる。

現在まで調査された組合式箱形石棺は，いずれも古墳時代に比定されるものであり，弥生文化時代に遡るものはいまだ確認されていない。

(2) 組合式箱形石棺の県内分布と石材

県内の組合式箱形石棺で調査報告されたもの，現存するもの，消滅しているが口碑の確実なものを含めると，およそ次のようなものがあげられる。（表1）これから，県内の正確な分布を知ることはできないにしても，大概の傾向を知る手がかりになると思われる。

これによると，組合式箱形石棺の分布の濃密な地帯は，吉野川沿岸と勝浦・園瀬川下流域であり，県南地方には，その存在がいまだ確認されていないのは大きな特異性といえる。

吉野川沿岸地方においても，その下流の徳島市国府町から麻植郡鴨島町にかけての地域(図4のⅡ)とその対岸の讃岐山脈の山麓にあたる板野郡板野町から鳴門市大麻町にいたる地域（図4のⅠ）に特に密集しており，上流に遡るに従いその数も減少し，美馬郡美馬町付近（図4のⅢ）で僅かに多くなることが知られる。また勝浦・園瀬川の下流にあたる，徳島市渋野町，勝占町，丈六町，八万町（図4のⅣ）にもその分布がみられ，県内を大きく3つの大密集地と1つの小密集地とに別けることができる。

表 1

No.	名称	所在地	立地	方位	材質	外護施設	構造 長側石	短側石	蓋石	棺底	副室	その他	法量（法内） 長さ	幅	深さ	副葬品
1	新官塚古墳	徳島市 渋野町	小舌状丘陵最先端頂部	E—W	緑色片岩	円墳	1枚	1枚	1枚	板石		赤色顔料	178.7	54.2	66.6	乳文鏡1　刀4 管玉19　剣2 なつめ玉2
2	熊山1号墳	〃 勝占町	独立丘斜面		〃		〃	〃	〃				96	48	39	
3	七ツ山古墳	〃	独立丘頂部		〃		3枚	2枚	3枚							刀？
4		〃 論田町			〃		2枚	1枚	2枚	礫敷			154	46 41	25	
5	恵解山 1号墳	〃 八万町	丘陵頂部		〃											五獣鏡，鉄鏃，甲の残欠，刀，衝角付冑，剣
6	〃 2号墳東棺	〃	〃	NW—SE	〃		1枚ずつ	1枚ずつ	1枚	板石敷		赤色顔料 蓋石加工痕	168	52(N) 50(S)		鏡，勾玉，小玉，臼玉 鉄刀，鉄鎌，鉄斧，刀子，竹製漆塗櫛
7	〃 西棺	〃	〃	〃	〃		〃	〃	〃		有 長側石共通	赤色顔料	176	40(N) 56(S)	48.5 (N) 51(S)	（棺内） 琴柱形石製品，管玉，竹製漆塗櫛，鉄刀子，鉄剣（鹿角装）鉄剣，布 （副室）　甲残欠，衝角付冑，鉄刀，鉄剣，鉄鎌，鉄斧，鉄鏃
8	〃 8号墳東棺	〃	〃	〃	〃		2枚(E) 3枚(W)	〃	2枚				197	42 37	40 34	鉄刀，鉄剣，鉄斧，鉄鏃

9	〃 西棺	〃	〃	〃	〃		2枚(N) 3枚(S)	1枚ずつ	1枚 加工痕	大・小 板石敷		赤色顔料	194	51 38	35 36	(棺内) 櫛，鉄剣、鉄のみ、鉄刀 (棺外) 鏃先形鉄器，鉄斧
10	〃 9号墳南棺	〃	〃	N—S	〃	竪穴式石室	1枚ずつ	〃	1枚 加工痕	小板石敷		赤色顔料	160	40(N) 43(S)	28(N) 35(S)	(棺内) 銅鏡，鉄刀 (棺内) 鉄刀子，鉄鎌，鉄斧， 鉄鏃，勾玉，臼玉
11	恵解山 9号墳 北棺	徳島市 八万町	舌状丘陵 先端中腹	E—W	緑色片岩		2枚ずつ 重ねつぎ	〃	2	小板石敷			114	33(E) 20(W)	23	管玉，臼玉 (棺外) 鉄刀
12	節勾山 2号墳	〃 名東町	舌状丘陵 頂部		〃	竪穴式石室	2枚ずつ	〃	1 加工痕	小板石敷			151	49 30	40 35	四獣鏡，勾玉 (棺外) 鉄剣，鉄斧，鉄鎌，刀子
13		〃 国府町 源田	舌状丘陵 頂部				3枚ずつ	〃		砂利敷			300	120		玉
14		〃 国府町 奥谷69	丘陵頂部	E—W	〃		1枚ずつ	〃	1枚		有 東短側石 共通					袋形土器1　提瓶1 杯5
15		〃 70	前方後円 墳前方部	N—S	〃		〃	〃	2枚				185	37		玉 刀
16	城山神社 古墳	〃 114	舌状丘陵 頂部		〃	竪穴式石室	1枚ずつ	石室の側 石共通		石枕						提瓶，馬具，高杯， 刀，斧，玉，坩
17		名西郡 石井町 内谷	尾根上	E—W	〃		〃	1枚ずつ	1枚	粘土						石釧
18		〃	舌状丘陵 斜面													杯，提瓶，坩，玉
19		〃	〃										210	70		
20		〃	〃													鉄刀 玉類5

21		名西郡 石井町 尼寺	舌状丘陵 頂部	E—W	緑色片岩	石積 （緑色片岩）	3枚ずつ	1枚ずつ		石枕			194	52 41	25	管玉4　ガラス小玉17 （棺外） 有蓋短頸壺1
22		〃 利包	尾根													臼玉
23		〃 高良	舌状丘陵 最先端頂部	E—W	〃		2枚ずつ	〃	1枚	砂質粘土		赤色顔料	187	38	43	（棺外） 鉄剣3　鉄斧1 鉄製品破片1
24		〃 前山	〃	E—W	〃		〃	〃	2枚				177	48(E) 44(W)		須恵器，金環，玉類
25		〃	〃	〃	〃		〃									
26		〃 清成	〃	N—S	〃		1枚ずつ	1枚ずつ	1枚	砂質粘土		赤色顔料	167	40(N) 37(S)	43(N) 47(S)	倣製内行花文鏡 鉄製品
27		〃	舌状丘陵 最先端斜面	E—W	〃		1枚ずつか	1枚ずつか	〃	粘土				40	30	
28		〃 横林	舌状丘陵 先端		〃		1枚と 2枚	1枚ずつ	〃	2枚の板 石敷			5尺8寸	1尺4寸 1尺2寸	1尺2寸	鉄刀
29		麻植郡 鴨島町 上浦	段丘上	E—W	〃	円墳	2枚ずつ	〃	8枚	粘土			120	46(E)	33	
30		〃 森藤	段丘斜面													鉄刀
31		〃 東禅寺	丘陵斜面		緑色片岩				1枚							須恵器
32		〃 川島町 山田	段丘上	E—W	〃		1枚ずつ	1枚ずつ	1枚							鉄剣 鉄斧
33		〃 山川町 住吉	段丘上			円墳	〃	〃	〃				182	60	45	
34		〃 山川町 麦原	〃													土器 刀剣 武具

35		三好郡 三加茂町 毛田														
36		三好郡 西祖谷山村 榎	山地中腹		〃						長側石 共通					
37	日出 D号墳	鳴門市	舌状丘陵 頂部	N—S	〃		3枚ずつ	〃	2枚 大・小				190	90(N) 56(S)	50	
38		〃 大麻町 東山谷	舌状丘陵 斜面													玉
39		〃 西山谷	〃													勾玉
40	ケンレイ サン古墳	〃 光勝院東 山	舌状丘陵 尾根	E—W	緑色片岩	石積 (砂岩)										
41		鳴門市 東平草	丘陵斜面													銀環 須恵器
42		〃 桧	〃													鉄器破片
43		板野郡 板野町 川端	舌状丘陵 頂部	E—W	緑色片岩		3枚(N) 2枚か (S)									
44	カンゾウ 山　古墳	〃 カンゾウ山	山頂部	E—W	〃	円墳	2枚(N) 3枚(S)	1枚ずつ	3枚	3枚の 板石敷		赤色顔料	5尺7寸	1尺1寸	1尺 内外	鉄刀（鹿角装） 鉄剣（　〃　） 鉄鏃
45		美馬郡 美馬町 重清	丘陵頂部	E—W	〃		2枚ずつ	〃	7枚	粘土			9尺	2尺	1尺〜 1尺 5寸	
46	願勝寺 1号墳	美馬郡 美馬町 願勝寺	段丘上	E—W	〃	横穴式石 室	1枚ずつ	石室の側 壁と共通	2枚				190	70	65	大刀，銀環，小玉，管 玉，刀子 （棺外） 鉄鏃
47		〃 喜来	段丘上	E—W	〃	石積 (砂岩)	2枚ずつ	1枚ずつ	5枚	粘土			129	30(E) 27(W)	22	蓋杯
48	桶川古墳	三好郡 三野町 芝生	丘陵斜面	E—W	〃		〃	〃					190	45(E) 27(W)	35	

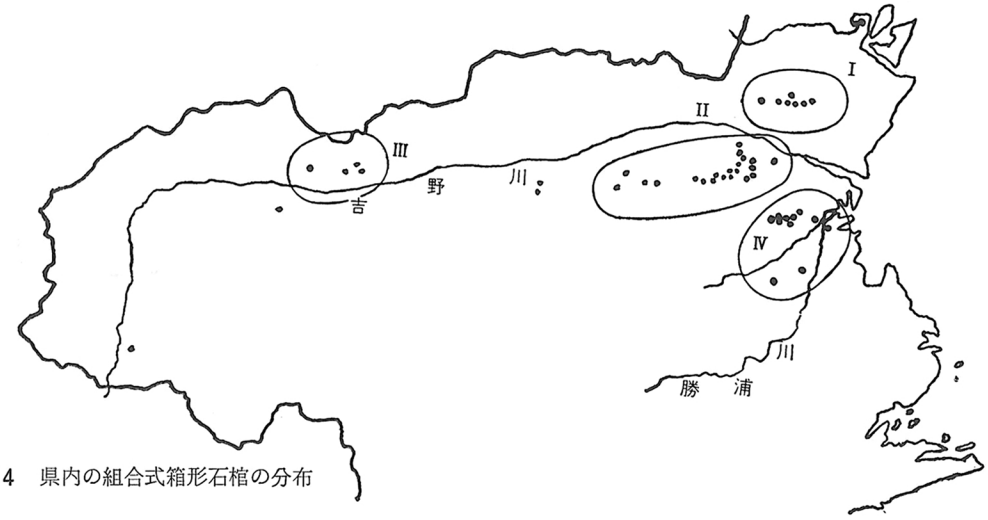


図4　県内の組合式箱形石棺の分布

県内の組合式箱形石棺には，すべて結晶片岩の板石が用いられており，この結晶片岩は，Ⅰ，Ⅲの地域には産出せず，Ⅱの地域がその産出地であり，Ⅳの地域は，その産出地に隣接した所といえる。すなわち，本県を地質構造上からみると，県北を東流する吉野川に沿って中央構造線がとおり，これを境にして，内帯と外帯に区分されている。香川県との境をなす讃岐山脈は，内帯に属し，和泉層群と呼ばれ，淡路の南端を通り，大阪の和泉山脈につづくもので，この層群は，基盤岩石は花こう岩で，基底礫岩，頁岩，砂岩からなっており，山麓は，洪積層の台地，扇状地からなっている所もある。従って結晶片岩は産出しない地域である。吉野川南岸一帯は，外帯に属し，本県中央にある剣山を含めて東西に走行する剣山山系の北斜面は地質上，長瀞系とよばれる地質構造であり，県西の三好郡から徳島市の眉山に至るまでこれにあたる。この長瀞系の地質は，結晶片岩層からなり，緑泥片岩，黒色片岩，紅簾片岩は，その代表的な岩石である。讃岐山脈に沿って存在するⅠ，Ⅲの地域の石棺，横穴式石室，竪穴式石室に用いられている結晶片岩は，すべて，吉野川南岸から運んだものとみるべきである。

(2)　組合式箱形石棺の立地と外部施設

組合式箱形石棺の埋葬法にいくつかの方法がみられる。立地上，丘陵の先端頂部，尾根に設けられたものと山麓の斜面，丘陵の斜面に設けられたものとに大別できる。（表Ⅰ参照）

山麓，丘陵の斜面に設けられた石棺は，封土はなく，その他の外護施設もなく，直葬されたものである。丘陵上，あるいは，その先端頂部，尾根の脊梁部に設けられたものには，何らかの外護施設をもつものが多いことが見うけられる。それには竪穴式石室，横穴式石室を構築したもの，石棺全体を石積み，封土で被覆したものがみられる。

（竪穴式石室の外護施設をもつもの）

石棺の四周を竪穴式石室で被覆したものには，徳島市名東町節句山２号墳，同八万町福万谷恵解山９号墳および同国府町矢野城山神社古墳があげられる。城山神社古墳は，昭和15年ごろ石取工事によ

って損壊された古墳である。舌状にのびる丘陵の最先端頂部にあり，結晶片岩の割石をもって，平面がほぼ正方形に近い竪穴式石室を築き，その石室内の中央に緑泥片岩の板石２枚で長側石をつくり，短側石は，石室の側壁と共通したものであり，中央の棺には，石枕を置き遺体を納置し，石室の側壁と石棺の長側石との間には，武具の類，他の一側には須恵器を納めてあったといわれている。註(12)

（横穴式石室の外護施設をもったもの）

石棺の四周を横穴式石室で被覆したものに美馬郡美馬町願勝寺１号墳が知られている。石室内に緑色片岩の２枚の長側石を用い短側石は石室の側壁と共通したものである。註(13)

（石積の外護施設をもつもの）

土中に石棺を直葬し，石棺全体を石積みで被覆したと考えられるものがある。鳴門市大麻町萩原「ケンレイサン古墳」名西郡石井町尼寺の古墳，また美馬郡美馬町喜来にあった石棺にみられる。註(14)

「ケンレイサン古墳」は，大麻町の光勝院の東にある丘陵の尾根にある組合式箱形石棺である。これは，数十年前に知られ，それ以後，原状のままに残したといわれている。石棺は，緑色片岩の板石を用いてつくり（石積みのため，使用枚数，大きさ不明），石棺全体を砂岩の塊石，約30個ほどで覆っている。この石積みの上の封土の有無，副葬品については不明である。石井町尼寺の石棺は，西半部が盗掘にあい原状は不明だが，残存していた東半部の調査から，石棺を構築し，遺体を埋葬した後割石で棺の蓋石全体を覆い，盛土したものと思われる。石積みに使用した石材は緑泥片岩の割石である。また，美馬町喜来に埋葬されていた石棺は，「ケンレイサン古墳」と同じく，棺全体を砂岩の塊石で覆っていたといわれ，これ以外にも美馬町には若干例があったようである。これらの石積みを用いた石棺は，追葬が行なわれたとは思われず単次葬としての墳墓の性格をもっていたものであると考えられる。

⑶　組合式箱形石棺の副葬品

前にのべたように，組合式箱形石棺の破壊されたものも多く，その存在の記憶さえもうすれているものもある。したがって副葬品の散逸も著しく，残存する断片的な副葬品から詳細な年代的な位置づけをすることは困難であるがその手がかりを求めたい。

組合式箱形石棺に副葬されたものをあげれば表２のように示される。これらの副葬品を分類すれば ⓐ銅鏡，鉄製武器，武具，農工具および装身具をもったもの，ⓑ大刀，装身具および須恵器をもったものに大別できる（表２）しかし，No17のように 凝灰岩製の石釧を もったものもあることは 見のがせない。ⓐの類型はNo６，10，12，があり，この範疇にNo１，５，６，９がいれられ，またNo23，26はともに盗掘された石棺であり，その副葬品全体は不明だが@の範囲にいれても大きな過誤はないと思われる。前述のように副葬品は断片的であるため，詳細な年代的な位置づけは不可能であるが，No17は古墳前期末中期初頭の 畿内的な性格をもつ古墳の 副葬品の様相をもち，@の範疇古墳中期的なものであり，ⓑは後期以降のものと考えたい。

表　2

No.	石製品	鏡	鉄製武器				甲冑	馬具	鉄製農工具						装身具		土器		その他	備考
			大刀	剣	鏃	その他			鎌	斧	のみ	鉇	刀子	その他	玉類	環類	須恵	土師		
1		○仿	○4	○2											○					赤
2																				
3			○?																	
4																				
5		○1	○2	○2	○27		○													
6		○1	○3						○1	○2			○1		○				櫛	赤
7	○琴柱		○2	○8	○98		○		○3	○8			○1		○				〃布	赤
8			○1	○1	○3					○1										
9			○1	○1						○1	○1			○1					櫛	赤
10		○1	○5		○40				○2	○4			○2		○					赤
11			○1												○					
12		○1		○1					○1	○2			○2		○					
13															○					
14																	○			
15			○												○					
16			○					○							○		○			
17	○釧																			人骨に朱
18															○		○			
19																				
20			○												○					
21															○		○			
22															○					
23			○1	○3					○1	○1										赤
24															}○	{○	}○			
25																				
26		○	○?		○?															赤
27																				
28			○																	
29																				
30			○																	
31																	○			
32				○						○1										
33																				
34			○				○										○			
35																				
36																				
37																				
38															○					
39															○					
40																				
41																○	○			
42																				
43																				
44			○	○	○															人骨に朱
45																				
46			○		○								○		○	○				
47																	○			
48																				

赤；赤色顔料使用

6。総　　括

谷口山の石棺をもとに徳島県内の組合式箱形石棺の集成をし略述してきたが古墳中期以前と考えられる石棺は，丘陵先端頂部，尾根の脊梁部にあり，厚くて堅牢な1枚岩の板石を側石または，蓋石に使い，棺内に赤色顔料を用いることが共通していると思われる。特に銅鏡を埋葬した石棺にこの傾向がある。このような石棺は，Ⅱ，Ⅳの地域にあつまっている。Ⅰ，Ⅲの地域の石棺の側石，蓋石は

２枚以上の板石を用いたものが多く，また板石の厚さも薄い。副葬品からみてもⅠ，Ⅲの地域は，Ⅱ，Ⅳの地域と異なり，ⓑに属するものがほとんどであり，古墳後期以降に比定されるものであるといえる。したがって，Ⅱの地域は古墳時代の前期末中期初頭から後期を通じてつくられた埋葬施設であり，Ⅳの地域は中期以降のものであり，Ⅰ，Ⅲの地域は堅牢な１枚石を用いていないとはいえ，政治的，軍事的，経済的支配層の墳墓と考えられる横穴式石室をもつ古墳があり，それには巨石が用いられている。これからみるとこの地域の組合式箱形石棺の構造は地域的特性よりも，共同体内における階層分化のあらわれとしての墳墓と理解することが適切であろう。したがって谷口山の組合式箱形石棺は，終末期の階層分化の発展としての家父長的な者の墳墓として，またこれらの群集墓の中の一つとして位置づけたいと思う。

おわりに

古墳時代の徳島を考えるとき，古墳時代に関する資料全般から考えねばならぬことはいうまでもなく，組合式箱形石棺という非常に狭い限られた分野からみて，これを論ずることは大きな過誤をおかすことはまぬがれない。しかし，古墳時代の認識の方法論の一つの試みとしてとりあげ，古墳時代を把握しようとしたもので，諸氏のご叱正をうける次第である。

最後にいろいろご指導をうけた，秋山泰氏，石川重平氏，津田快洞氏，佐藤忠邦氏および本県の埋蔵文化財調査に貴重な資料を提供していただいた方がたに深く感謝の意をあらわしたい。

〔註〕

1．東京人類学会報告　第62号「徳島近傍七ツ山及ビ丈六山ノ石棺」香川槐三
2．　〃　第63号「徳島近傍ノ石棺」鳥居竜蔵
3．考古学雑誌　第５巻第７号，第９号，第10号，第11号
4．徳島県史跡名勝天然記念物調査報告　第１
5．　〃
6．吉川弘文館「石井」昭37
7．徳島県文化財調査報告書　第９集，第10集，昭和41，43
8．　〃　第９集　昭41
9．石井町文化財調査報告書　第４集　昭44
10．　〃　〃
11．紀淡・鳴門海峡地帯における考古学調査報告，同志社大学文学部文学科　1968
12．石川重平氏の教示による
13．古代学研究56　「徳島県美馬郡願勝寺１号墳」石丸洋　1969
14．津田快洞氏
15．「渋野の古墳」渋野町公民館
16．三野町の文化財　第１集

徳島県下出土のナイフ形石器・細石器

天　羽　利　夫

1 はじめに

徳島県内で旧石器資料が注目されるようになったのは，昨年あたりからである。その発端は，阿南市桑野町廿枝遺跡の発見であった。筆者等は，その時点で資料を集成し，報告しておいた。[註(1)]

ところが，最近になって，県西部で活躍されている北川右二，佐藤忠邦，田中猪之助の三氏から新しくナイフ形石器を発見したとの報告を相ついで受けた。それらの資料のなかには，県内ではじめてのいわゆる国府型と呼ばれるナイフ形石器があったのである。前回の報告と重複する資料が多いが，これらの新資料を加えて，本紀要の発刊を機会にあらためて報告しておきたいと思う。

本稿執筆にあたって，遺物所蔵者の方々には資料の発表についてご快諾いただいたほか，とくに北川右二氏，佐藤忠邦氏，田中猪之助氏にはいろいろお世話いただいた。ここに記して感謝する次第である。

2 ナイフ形石器

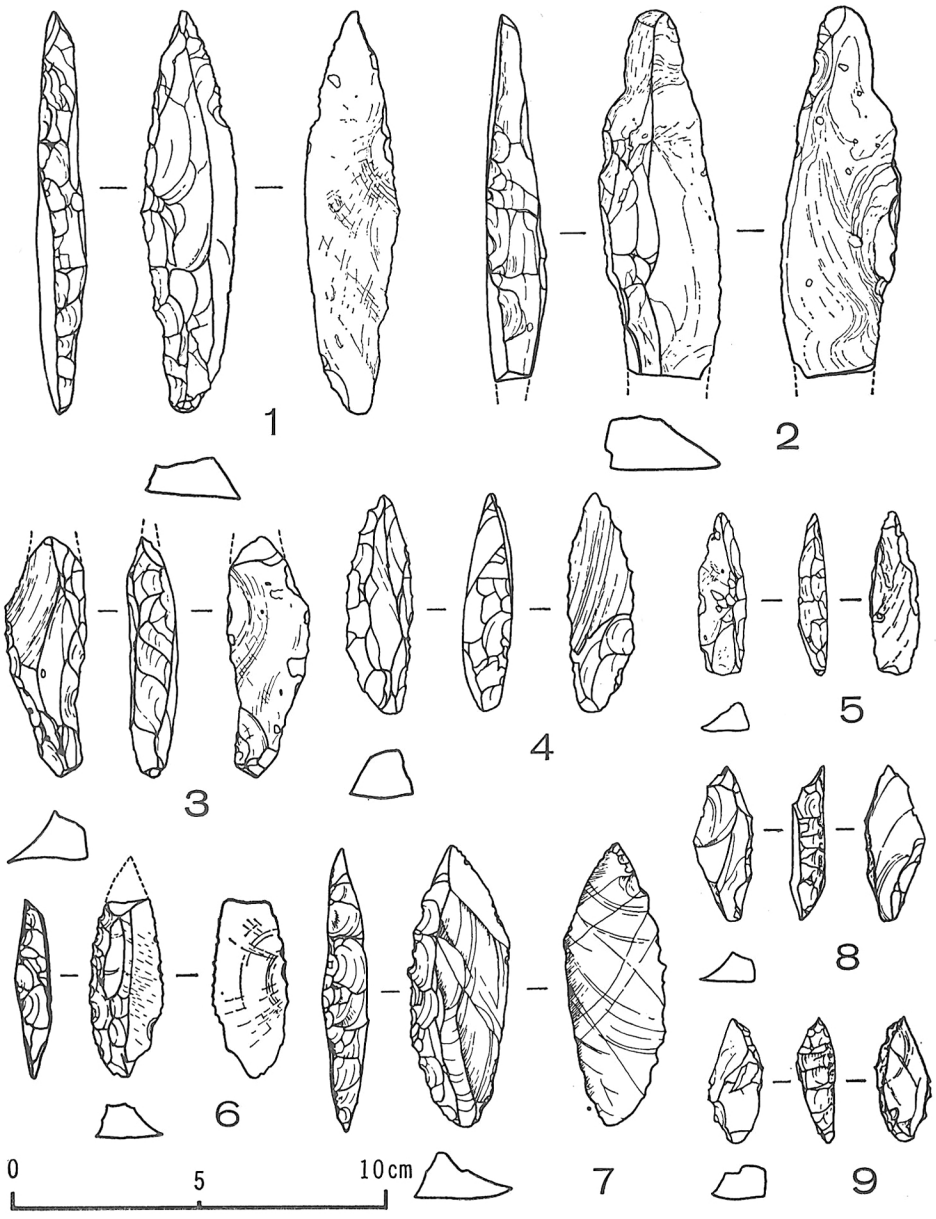
(1) 三好郡三加茂町丹田出土（第2図1～2）

三好郡三加茂町鍛冶屋敷の加茂谷の西峰，標高約300mの丘陵先端部に県指定史跡丹田古墳がある。この古墳から，稜線にそって西へ百数十mの丹田部落（わずか三軒の）に至るまでの南斜面は，[註(2)]かなり急傾斜ながらも開墾された畑地がひろがっている。

この南斜面から，昨年2本のナイフ形石器が発見された。①は丹田豊氏が5月に自宅裏で採集したもので，②はそれより東側の丹田古墳にほど近い，現在開墾されている一番東の畑から，北川右二氏が11月に採集したものである。遺跡は，赤土に混じって岩盤の破砕された結晶片岩が一面に散らばっている。若干のサヌカイトの破片が採集されているが，参考になる資料はまだ見当らない。

第1図 丹田遺跡（左下）及び東上野遺跡（右上）地形図（5万分の1，『池田』）

① サヌカイト製の非常にすぐれた大形のナイフ形石器である。全長10.7cm，巾2.5cm，厚さ1.2cm。先端をわずかに欠いているが，鋭く，全体に細身である。一見して横剥ぎ剥片であることがわかる。おそらく瀬戸内技法による翼状剥片を使用したものと思われる。丹念に調整し，しかも剥離痕は明瞭である。一側辺は剥片の鋭さを残して刃部とし，何の加工もしていない。一方は剥離面から二次加工をして調整している。断面は台形状を呈する。田中猪之助氏蔵。



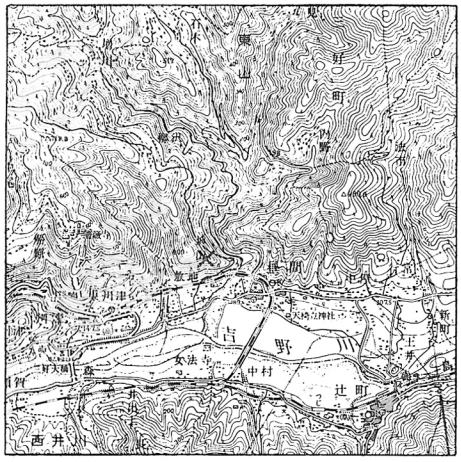
第2図　徳島県下出土のナイフ形石器

①～②　三好郡三加茂町丹田出土　③　三好郡三好町昼間・土取り出土　④～⑤　三好郡三野町勢力・東上野出土
⑥　板野郡板野町羅漢・平山出土　⑦～⑨　阿南市桑野町廿枝出土

②　①に比して粗雑であるが，同じくサヌカイトを原石とする。これも翼状剥片を使用している。剥片のままの状態で，とくに鋭利にするという工夫もみられない。基部は折れている。長さ9.9cm，巾3cm，厚さ1.4cm。もともと①よりも大きかったのであろう。断面は①と同じく台形状であるが，打面側はほとんど直角に近く，先端部は三角形となる。

⑵　**三好郡三好町昼間字土取出土**（第2図3）

昼間には，古くから山城で知られる標高400mの城山がある。城山の頂上から東側50～60m下のところに，小川谷に面して平坦な台地がひろがっている。ここから石鏃などが出土するということは，



第3図　土取遺跡地形図（5万分の1，『池田』）

かなり前から知られていたようである。ここに示す資料は，昭和44年10月，北川右二氏[註(3)]が石鏃などといっしょに採集したものである。他の石器とは年代を異にすると思われるので，この1点の紹介のみにしておく。

③　先端を欠くが，7～8㎝はあったであろう。長さ6.4㎝，巾2.2㎝，厚さ1.3㎝。サヌカイトの横剥ぎ剥片を使用している。平面的にはやや三角形となる切り出しの形態であろうか。両側を打調しているが，左側上部から先端にかけて剥片のままを刃部としている。

(3)　三好郡三野町勢力字東上野出土（第2図4～5）

吉野川の北岸三野町は，河岸段丘の発達したところで，地元の熱心な愛好者の努力もあって，いたるところに弥生時代の遺跡が確認されている。この遺跡も，おびただしい数の石鏃などが出土することで注目されていた。④の資料については，旧稿で紹介しておいたが，そのなかでまた1点発見したらしいと述べておいたのが⑤の資料である。④と同じく，佐藤忠邦氏が昭和44年4月に採集したものである。

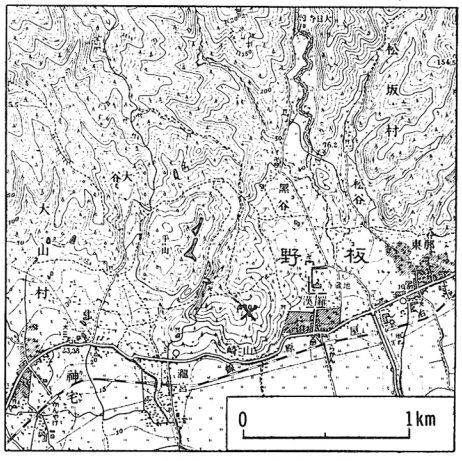
④　全長5.8㎝の完形品で，巾1.7㎝，厚さ1.3㎝のサヌカイト製である。大きさに比して，厚味がある。横剥ぎの剥片を使用し，両側に剥離面から二次加工をしている。また剥離面の基部には若干の調整痕を残している。

⑤　④よりも小形で薄い。長さ4.4㎝，巾1.3㎝，厚さ0.8㎝。両側ところどころに新しい欠けが見られる。加工痕は明瞭である。一側辺は剥片のまま刃部とし，打面側は剥離面から二次加工している。断面は三角形。原石はサヌカイト。

(4)　板野郡板野町羅漢字平山出土（第2図6）

四国霊場第5番札所地蔵寺のすぐ西側の小高い山は，阿讃山脈から南にせり出して広がる平坦な台地で，磯尾山と呼ばれている。この資料は，地元の吉兼高市氏が果樹園造成中に採集したもので，今から6年前のことである。この台地から数多くの石器が発見されているが，この資料とは年代を異にするものばかりである。

採集地点は，台地の先端に近い，標高80.8mの三角点（この三角点は直径10mほどの円墳の上に立っている）[註(4)]のすぐ東側である。出土地点は果樹園にか



第4図　板野町羅漢・平山出土地点
（2万5千分の1，『大寺』）

わり，ブルトーザーで整地されたらしいが，周辺の畑地は期待がもてる。

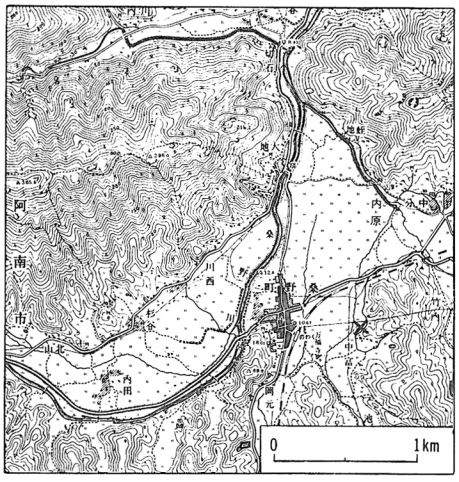
⑥　サヌカイト製。白く風化しているが，加工痕は明瞭である。先端は欠けており，約６cmはあったものと思われる。長さ4.8cm，巾2.0cm，厚さ0.9cm。横剥ぎ剥片を使用している。翼状剥片に近い形態である。一側辺は，剥離されたままの刃部をもち，わずかに刃こぼれらしい痕跡がある。一方，打撃面は剥離面からていねいに調整している。

⑸　阿南市桑野町廿枝出土（第２図７～９）

今まで紹介してきた遺跡は，いずれも県北部の吉野川流域にある。廿枝遺跡は，県南のリアス式海岸で有名な橘湾の西側，標高140m程度の低い山塊の西麓にある。前述の４例と異なり，やや低く立地し，しかも北斜面下にあって，北側の水田との比高は３～４m程度である。この遺跡については旧稿で詳しく紹介しておいたので参照されたい。

この資料は，昭和42年８月，自宅の宅地を造成していた佐藤忠男氏が発見したものである。残念なことに，遺跡のほとんどは破壊されてしまったようである。この遺跡の特徴は，チャートを主体とした石器群にあり，県北で見られるサヌカイトを主体とする遺跡とは異なっている。[註(5)]

⑦　きわめて精緻につくられている。酸性凝灰岩製の完形品で，長さ7.5cm，巾2.7cm，厚さ1.2cm。一見，翼状剥片のように見えるが，横剥ぎではなく縦長剥片を使用している。一側辺は剥離されたままの状態で鋭い刃をもち，片側は剥離面から調整し，かなり細かく二次加工している。



第５図　廿枝遺跡地形図
（２万５千分の１，『馬場』）

⑧　チャート製で，小形の切り出し形である。チャート特有の鋭さが見られる。おそらくは縦長の剥片を使用したものと思う。左上半分は剥片のまま残し，下半分と反対側に二次加工をほどこしている。長さ4.2cm，巾1.6cm，厚さ0.8cm。

⑨　⑧とほとんど同じ形態的特徴をもつが，さらに小さい。同じくチャート製。長さ3.3cm，巾1.5cm，厚さ0.9cm。先端は鋭いが，身は厚い。横剥ぎの剥片を用いている。

考　察　筆者が，徳島県内ではじめてナイフ形石器に接したのは羅漢遺跡出土の資料で，昭和42年の秋のことであった。それ以来，この類の石器にはとくに注意していたのであるが，昭和43年12月に廿枝遺跡の確認をきっかけに，今日まで第２図に示したとおり５遺跡９点を数えるまでになった。いずれも採集品ではあるが，資料の乏しい本県の現状からして，いかに貴重な資料であるかいうまでもない。

ところで，旧稿において，廿枝遺跡のナイフ形石器を形態的特徴から二形態に分類しておいた。⑦の大形の木葉状ナイフ形石器を廿枝Ⅰとし，⑧，⑨の小形で切り出し形を廿枝Ⅱと仮称した。そして廿枝Ⅱをいわゆる井島Ⅰ型に比定し，廿枝Ⅰはそれより古く宮田山型ないしは国府型に対比しておいたのである。[註(6)]

瀬戸内地方におけるナイフ形石器は，いわゆる瀬戸内技法による翼状剥片を用いた国府型，つづいて翼状剥片という一定したとらえかたはできないにしても，任意の横剥ぎ剥片をもとにつくられる宮田山型，さらには細石器的な小形の切り出し形ナイフの井島Ⅰ型という展開をしている。とりわけ，一貫して横剥ぎ剥片を基本とし，次第に小形化の傾向をたどっているといえる。[註(7)]

このようななかで，徳島県下出土のナイフ形石器は，はたして瀬戸内地方の範ちゅうで把握することができる。丹田遺跡出土の①，②は，いずれも翼状剥片からつくられた国府型とみてもよいであろう。土取り遺跡の③や東上野遺跡の④，⑤の形態は，横剥ぎ剥片を使用した宮田山型とみなすことができる。また，羅漢遺跡の⑥は，翼状剥片に近いが，同じく宮田山型とみて差し支えない。これらの石器がサヌカイトを原石としていることからも，瀬戸内の様相と類似している。したがって，廿枝Ⅱがチャート製という違いはあるにしても形態的には井島Ⅰ型であり，これを加えることによって，本県におけるナイフ形石器は系統的に把握できる。

ただ，旧稿において指摘しておいたように，廿枝Ⅰのナイフ形石器については，今なお検討をまちたい。この石器が，縦長の剥片によってつくられていることは，少なからず問題を提起している。ある意味では，瀬戸内技法とサヌカイトという問題に側面から具体例を示すであろうし，また見方をかえて，いわゆる九州型ナイフ形石器における問題と同じように廿枝Ⅰを考えてみる必要もあろう。[註(8)]

廿枝遺跡出土の剥片をみると，チャートが原石であるせいか一定した剥片はほとんど見当らないが，わずかに第6図に示した⑰，⑱の二点には共通した特徴がある。いずれも4cmあまりの縦長剥片である。瀬戸内地方での縦長剥片は，岡山県鷲羽山遺跡において顕著であり，国府型ナイフ形石器より古い鷲羽山Ⅰの文化のなかでとらえられている。筆者は，廿枝遺跡の場合，むしろ廿枝Ⅱのナイフ形石器と関連して考えている。しかし，今のところ解決の糸口は何も見い出していない。[註(9)]

ろ　細　石　刃

(1) 阿南市桑野町廿枝出土（第6図10～13）

前述のナイフ型石器と同時に佐藤忠男氏が採集したものである。

⑩　乳白色の酸性凝灰岩を使用している。全長2.4cm，巾1.0cm，厚さ0.3cm。中央に1本稜線をもち，両側辺は鋭く，わずかに刃こぼれ様の痕跡を残す。断面は三角形を呈する。

⑪　チャート製で，下部は欠損したようである。長さに比して巾広い。全長1.95cm，巾1.2cm，厚さ0.4cm。形態は⑩とほとんど同じ。両側辺に刃こぼれ様の痕跡が見られる。断面は同じく三角形。

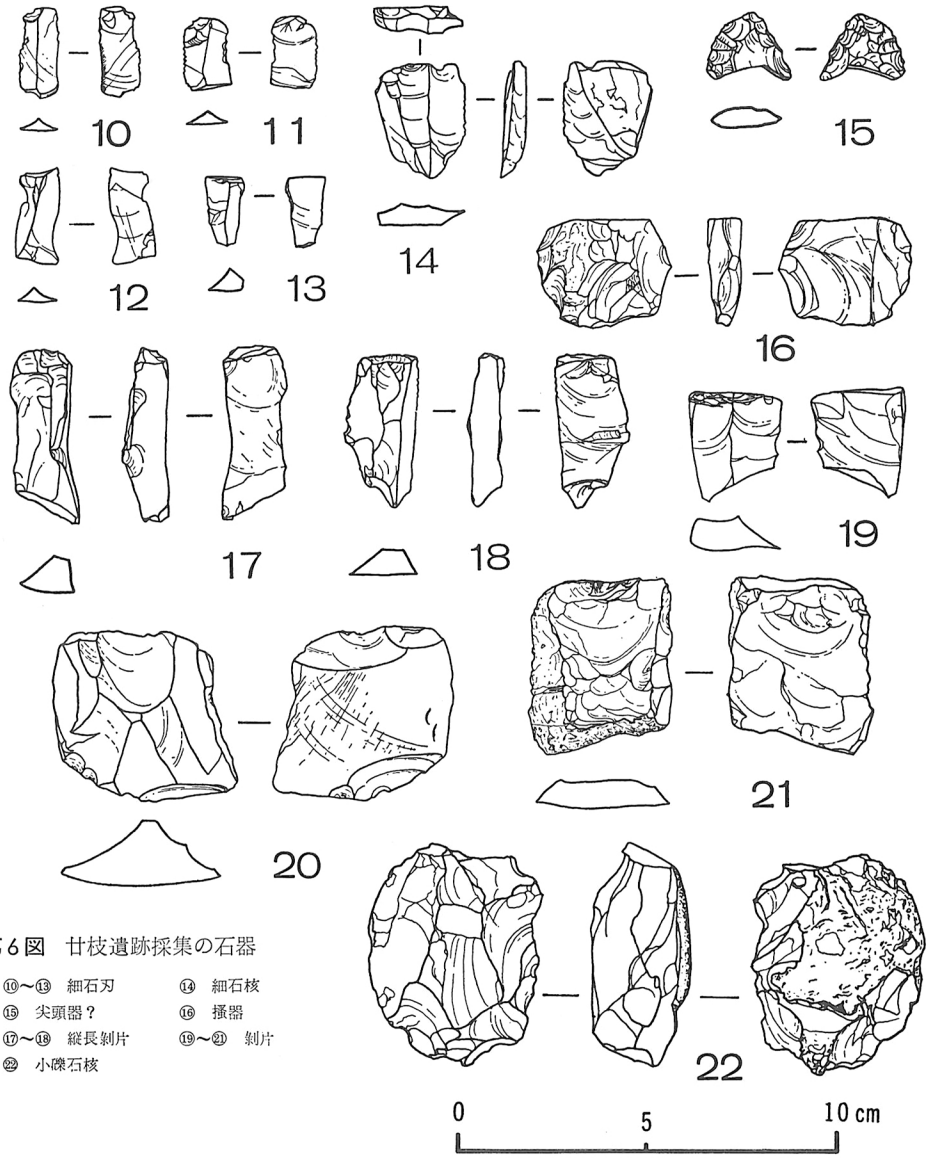
⑫　一応細石刃としておいた。両側辺が中央の稜線に対し，わん曲しているが，いずれも鋭い。断面三角形。チャート使用。全長2.6cm，巾1.1cm，厚さ0.4cm。

⑬　これも一応細石刃としておいた。左側辺にわずかに刃こぼれ様の剥離を残す。長さ1.8cm，巾1.0cm，厚さ0.6cm。厚味がある。チャート製。

考　察　筆者の知るかぎり，県内で細石刃の出土はこの例だけである。旧稿で，これらを廿枝Ⅲとして把握し，瀬戸内での細石刃文化，井島Ⅱに対比して考えてみた。[註(10)]

⑭は細石核の一部ではないかと考えられる。チャート製で，2本の稜線をもち，連続的に剥離されている。反対側は，結晶部分で剥離している。しかし，細石核としてもどのような形態の細石核で

あったか不明である。



第6図　廿枝遺跡採集の石器

⑩～⑬　細石刃　　⑭　細石核
⑮　尖頭器？　　⑯　掻器
⑰～⑱　縦長剥片　　⑲～㉑　剥片
㉒　小礫石核

4　お　わ　り　に

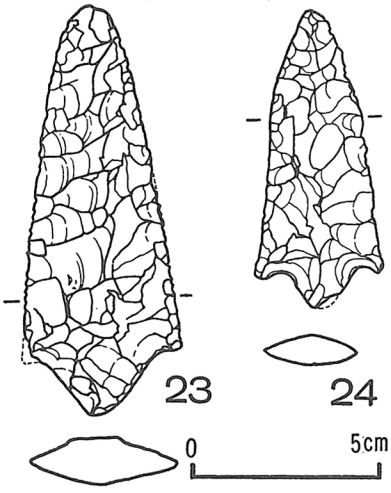
以上，徳島県内出土のナイフ形石器，細石器について紹介してきた。これらを集成し検討してみるとき，今後の研究課題をいくつか示唆している。

その一つは，徳島県内において，サヌカイトを主体とする遺跡とチャートを主体とする遺跡の二つの姿が存在するのではないか，と想起されることである。先に示した資料でみるかぎり，サヌカイトを主体とする遺跡は県北部の吉野川流域のようである。これに対して，チャートを主体とする遺跡は

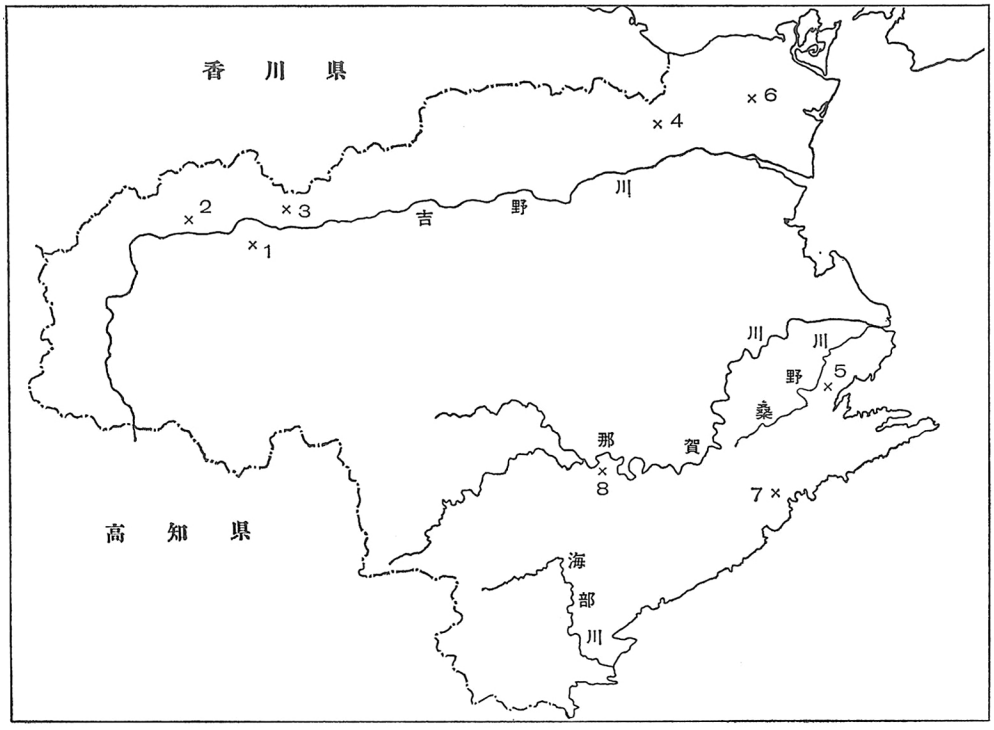
いうまでもなく廿枝遺跡のように，チャートの産出地に近い県南部の山間部であろう。県内のチャート産出地は，剣山から東に縦走し中津峰を経て，小松島に至るいわゆる秩父層群に属する一帯である。那賀川上流にある古屋岩陰遺跡からは，押型文土器に伴なってチャート製石鏃3点が出土しており，県南山間部は有望である。廿枝遺跡がほとんど破壊された現在，もはやこの遺跡から多くを望めない。[註(11)] 類似遺跡の発見がまたれるところである。

これに関連して注意しなければいけない問題は，サヌカイトの石器群とチャートの石器群のあり方であろう。今のところ丹田遺跡，土取遺跡，東上野遺跡，羅漢遺跡などいずれもナイフ形石器単独の出土であり，各遺跡の実体を知るまでには至っていない。幸いなことに，廿枝遺跡においてはナイフ形石器をはじめ，細石器，尖頭器，掻器，小礫石核，縦長剥片，石鏃など多くの種類が発見されている（第6図参照）。ただ，これらがどのような組合せにあったか明らかでないが，遺跡の様相を知ることのできる唯一の資料である。

また編年的には，丹田遺跡出土の国府型ナイフ形石器が一番古く位置づけられるが，それ以前の石器の発見も期待されてよい。新しくは細石器文化に続く有舌尖頭器は，県内で鳴



第7図　有舌尖頭器2例
1：鳴門市大麻町大谷出土
2：海部郡由岐町木岐出土



第8図　遺跡分布図
1　三好郡三加茂町丹田　2　三好郡三好町昼間　3　三好郡三野町勢力字東上野　4　板野郡板野町羅漢字平山
5　阿南市桑野町廿枝　6　鳴門市大麻町大谷　7　海部郡由岐町木岐　8　那賀郡上那賀町古屋字堂見谷

門市大麻町大谷，海部郡由岐町木岐の２例があり，これらは断片的ながらも，編年の穴を一つ一つ埋めていくように思う。[註(12)]

徳島県においては，旧石器文化の研究はもとより，縄文文化の研究などまだ未開拓の分野が多い。今後これらの研究の進展に期待するところは大きい。 先学諸氏のご批判とご指導を賜わりたいと思う。

註(1) 天羽利夫，立花博「徳島県廿枝遺跡採集の石器―徳島県出土のナイフ形石器―」（『古代学』第16巻１号所収，京都，昭和44年）

(2) 三加茂町教育委員会他『丹田古墳調査説明会のしおり』（徳島，昭和44年）
同書によれば，この古墳は，４世紀代の全長37mの積石の前方後方墳である。昭和44年３月，発掘調査によって銅鏡，鉄剣，鉄斧など出土している。

(3) 三好町誌編集委員会編『三好町誌』（徳島，昭和34年）
徳島県教育委員会『徳島県遺跡目録』（『徳島県文化財調査報告書』第７集所収，徳島，昭和38年）
同書には県番号538として報告されている。

(4) 前掲書『徳島県遺跡目録』所収
同書の県番号357がこの遺跡である。

(5) 註(1)に同じ

(6) 鎌木義昌「香川県井島遺跡―瀬戸内における細石器文化―」（『石器時代』第４号所収，東京，昭和32年）

(7) 鎌木義昌・高橋護「瀬戸内地方の先土器時代」（『日本の考古学』第１巻所収，東京，昭和40年）

(8) 鎌木義昌・間壁忠彦「九州地方の先土器時代」（前掲書『日本の考古学』第１巻所収）
同書は「国府型ナイフ型石器の技法が特異なものであっただけに，縦長剥片による九州型ナイフ型石器の出現は瀬戸内地方でのナイフ型石器の推移とは別の文化的影響によるものか，あるいは使用した石材の性質によって自然におこりうるものか問題は多い」と指摘している。

(9) 鎌木義昌「岡山県鷲羽山遺跡調査略報」（『石器時代』第３号所収，東京，昭和31年）

(10) 註(6)に同じ

(11) 立花博「古屋岩陰遺跡発掘調査の報告（１～２）」（『徳島県博物館報』第５～６号所収，徳島，昭和42～３年）

(12) 註(1)に同じ

徳島県の洞窟動物相

木　内　盛　郷・吉　田　正　隆
徳島工業高等学校　・　徳島農業大学校

洞窟学（Speleology）が我国において一応の形態をととのえてからまだ20年ほどにしかならないが，欧米諸国においてはすでに19世紀の中乃至後期にはじまり，生物学をはじめ人類学・考古学・古生物学・地質学・地下水学など多くの学問分野に沢山の貴重な資料をもたらしている。たとえば洞窟生物学の研究成果は，環境に対する生物の形態・生理・生態の適応に関する諸問題はもちろんのこと生物の進化と系統発達を解明するための手がかりとしてきわめて重要な根拠となる資料を提供しており，ひいては地質時代における古地理の復元にまで大きな役割を果している。このように洞窟を学術的研究対象とした調査が高く評価され，広く認識されるようになって，我国でも各地の主要な洞はすでにそのほとんどが調査されている。

本県においては，中央部をやや南寄りに東西に走る秩父古生層を中心にした石灰岩層が存在するために，大小併せて20余りの洞窟が知られているが，従来その調査は石川重治郎氏（1954）および上野俊一氏（1955，1957）らによる業績があるだけで，かなりの洞窟が未調査のままに残されて来た。しかるに近年，化学工業の発達にともなって石灰の需要が著るしく増大し，これをまかなうために各地の石灰岩層が削りとられ，著名な鍾乳洞までが次々とその姿を消してゆきつつある。もちろん本県においても例外ではなく，すでに井関の窟はなく，竜ノ窟も潰滅の危機にさらされている。

徳島県の洞窟分布
（●：石灰洞　×：非石灰洞）

筆者らが洞窟の調査を志した直接の動機はこうした貴重な自然の消失から，せめてその標本や資料なりを蒐集し明らかにしておくことが目下の急務であると感じたためであった。従って，調査の中心は県内各洞窟の動物相をしらべることにあったが，上記の目的も含めて，洞の測図や写真の撮影をはじめ，できるだけ多くの資料を蒐集するように心がけた。調査の進行につれて次々と新しい問題が発生し，今後の精査を心要とする事項が山積しているが，現在までに得られた結果を一応とりまとめてここに報告しておく。

この調査の全般にわたって終始懇篤な指導と援助を賜り，本稿の校閲の労を執られた国立科学博物館の上野俊一氏に心より感謝申し上げると同時に，それぞれの動物分野における同定ならびに種々の教示をいただいた次の諸氏にも，ここに謹んで感謝の意を表する。

Albert VANDEL (Laboratoire de Zoologie,Faculté des Sciences,Toulouse) ……等脚類
石川　和男　（松山東雲女子短大）……ダニ類
上野　益三　（甲南女子大）……端脚類
上野　俊一　（国立科学博物館）……甲虫類
川勝　正治　（藤女子短大）……渦虫類
小松　敏宏　（長野教育センター）……蜘蛛類
沢田　高平　（高槻市）……甲虫類（アリヅカムシ科）
長谷川善和　（国立科学博物館）……獣骨類
波部　忠重　（国立科学博物館）……貝　類
村上　好央　（愛媛県教育委員会）……倍脚類
森本　義信　（姫路高校）……水棲生物類
八木沼健夫　（追手門学院大）……蜘蛛類
吉井　良三　（京都大）……跳虫類
渡辺　泰明　（東京農大）……甲虫類（ハネカクシ科）

また上記諸氏のほかに文献や調査方法等について次の諸氏の援助が与えられたことに謝意を表したい。

阿部近一（徳島県博物同好会）石川重治郎（元高知女子大）川沢哲夫（日本特殊農薬）庫本正（秋吉台科学博物館）黒佐和義（東大医科研）酒井雅博（愛媛大学生）高田保二（徳島新聞）中条道夫（香川大）水島淳（元関西大探検部学生）和田賢次（徳島県教育会）

なお一般に本県の洞窟は不便な山中にある場合が多くてアプローチが困難であるが，この点現地調査において次の諸氏の親切な協力のあったことを記し，御礼を申し上げる。

井地岡武春（木沢村）岡川清（上那賀町役場）河野博章（木頭村教育委員会）

この調査は昭和42年度徳島県博物館建設記念学術奨励金の交付を受けて行われたものである。

調　査　方　法

(1) 調査回数について

上記奨励金の交付を指定された昭和42年度以降の調査回数を洞別に集計すると次の通りとなる。

竜ノ窟（13回）禅定窟（３回）帆柱ノ窟（１回）日店洞（13回）桃源第１洞（３回）桃源第２・３・４洞（各１回）明神第１洞（１回）明神第２洞（２回）不動ノ窟（３回）折宇第１洞（１回）折宇第２洞（２回）その他の小洞（６回）

一般に洞窟内の気象環境は四季を通じてほとんど変化がなく，そこに見られる動物相も地表種のような季節的消長が認められず恒常的で，各ステージが同時に並行して見られることさえある。しかし動物にはそれぞれの種に固有な発生周期があるし，小規模な洞や外との通気孔の多い洞では内部気象が外部の影響を受けて変動し，それにともなって動物相にも変化がおこることは当然考えられる。また栄養源となる有機物に乏しい環境であるため，洞窟動物は個体数の少いのが普通で，棲息が確認される機会はひじょうに得がたいものである。こうした理由から調査は丹念に繰り返される必要があると考え，代表的な竜ノ窟と日店洞に対してはできる限り調査回数を重ねてみた。なお，この中には上野俊一氏３回，村上好央氏１回，森本義信氏１回の日店洞，竜ノ窟等の調査が含まれている。

⑵　洞窟動物の採集について

採集には主として肉眼による探査の方法がとられたが，日店洞で３回，竜ノ窟で１回はトラップによる採集を試みた。トラップの餌にはロックフォール・チーズ（Roquefort cheese）と挽肉とを等量ずつ混合し，洞外で数日間放置して腐敗発酵させたものを使用し，トラップの保存液にはゴルト液（Galt's solution；食塩５＋硝石１＋抱水クロラール１＋水100）とグリセリンの等量混合液を入れた。この方法で採集した標本はすべて50％アルコール液浸標本にして保存した。採集方法としてはひじょうに効果的で多量の捕獲が可能であるが，その反面洞内の動物相をかき乱すおそれもあるので乱用を慎んだ。石灰採掘がすぐ近くまで及び調査が急がれた竜ノ窟，目的としたある種の採集がひじょうにむつかしかった日店洞のばあいにだけ使用した。

日店洞は貧栄養洞で，他洞に比較して動物の棲息密度は明らかに低い状況にあった。そこで洞内の３個所に藁束と木片を持ち込んで動物の増殖をはかった。洞内に外部の物を運び込むことにはかなりの問題があるけれども，洞窟という特殊な環境条件は，たとえそのために一時的な混乱がおこっても比較的短期間のうちに，搬入物について侵入して来た動物は淘汰されてしまうものと考えられる。分解の速い藁は速効的で，チビゴミムシ類では約２年ほどで明らかな個体数の増加が認められた。これと対照的に，洞内に仏をまつり，ここを修行の場としている禅定窟では，信者が持ち込んだ様々な有機物が残されていたために個体数の豊富な洞であったが，近年観光客に対する配慮からこれらが取り除かれ，以後かなりの減少が目立っている。このことは洞窟動物の保護や調査にあたって考慮したいことがらである。

アリヅカムシやダニ類などの土壌動物の採集では，洞内の土壌を持ち帰り，ベルレーゼ装置にかけて採集する方法もとった。水棲動物の採集は自作の小型プランクトンネットを使用した。しかし，ダニ類や水棲動物に関する筆者らの調査はまだ充分でなく，今後の精査にまたねばならない。

たて穴の底部ではしばしば獣骨等が発見され，古生物学上貴重な資料が得られることがあるが，筆者らの帆柱ノ窟，桃源第２洞における採集では，シカ，ノウサギ，アナグマ，ネズミ等の比較的新しい時代のものばかりであった。これは採集が表面だけに終ったためと思われ，今後更に深く掘り下げ

れば面白い結果が得られるのではないだろうか。

(3) 測図の方法について

竜ノ窟，禅定窟，帆柱ノ窟，日店洞，桃源第1洞，不動ノ窟ではその平面測図を作成した。測量の方法については日店洞において上野俊一氏から直接の指導を受けた。測量用具には自作の小型測板，エレベーター三脚，クリノメーター，アリダード，間縄，赤ランプを使用した。測量には長時間を要するので，時間的に都合のつかない洞のばあいも，概念図の作成や洞長の測定は行うようにつとめた。なお，測図中の記号については日本ケイビング協会の採っている方式に準じた。

(4) そ の 他

気温ならびに地下水温の測定には100°Cアルコール棒状温度計を使用した。地下水のpHは森本義信氏が行った標準列法比色法による測定値である。

日店洞では上部支洞に入るために和田賢次氏にロッククライミングによる登はんルートをひらいてもらった。内部の岩盤が固く，石灰生成物におおわれた表面が脆いため，ジャンピングの使用にひとかたならぬ苦労をかけた。

調 査 結 果

各洞ごとに洞窟の概要と，採集又は目撃された動物名を次の要領によって列記する。

洞名，所在地の次は国土地理院5万分の1地図区分であり，各洞が属する地層名は，平山健氏らの資料（巻末文献番号31）によった。動物学名の前の＊印は今回の調査によって発見，命名された新種であることを示し，未同定又は和名のない種は和名欄に所属する科名・属名等を（ ）を付けて記した。次の人名は同定者である（上野とあるのは上野俊一氏をさし，上野益三氏のばあいはフルネイムで示した）。次の数値は採集頭数で，目撃数のばあいは目撃と付記し，（ ）の中のローマ数字はその月を示した。文献の（ ）中の数値は巻末文献番号に対応する。なお特記事項のない小規模の洞に関する記録は省略した。

1 竜ノ窟（Ryū-no-iwaya Cave）

阿南市加茂町字黒河22番地，地図；阿波富岡，四国石灰株式会社所有。

若杉層群（古生代二畳紀中〜後期）

太竜寺の南東，標高約200mの山腹に開口する本県の代表的鍾乳洞で，洞口高さ1.6m，幅1.4m，壮年期の横穴である。古くから信仰の対象として有名で，信者によって持ち込まれた木材や藁が残っており，グアノも少くない。地下水のpHは7.6。

測定月	1月	7月	10月	11月
洞内気温	8.0	14.8	14.5	14.6
洞内水温	12.3	16.5	15.0	15.3
洞外気温	4.8	25.3	14.5	19.7

1. *Dugesia japonica* ICHIKAWA et KAWAKATSU ナミウズムシ，川勝；1(VII)，5(VIII)，30(XII)：文献（1,25）
2. Gen.sp.（イトミミズ類）森本；1(VI)，3(XII)
3. *Bythinella nipponica* MORI ホラアナミジンニナ；1(XII)：文献（25,27）
4. *Japanochlamys awaensis* (PILSBRY) アワクリイロベッコウ，波部；1(VII)
5. *Urazirochlamys doenitzii* (REINHARDT) ウラジロベッコウ，波部；1(VII)

6. Gen.sp.（ケンミジンコ類）森本；11(XII)
7. Gen.sp.（ソコミジンコ類）森本；91(XII)
8. Gen.sp.（カイミジンコ類）森本；3(XII)
9. **Hyloniscus uenoi* VANDEL アワメクラワラジムシ,VANDEL；1(V),1(IX),1(XI)：文献(2,26)
10. *Pseudocrangonyx shikokunis* AKATSUKA et KOMAI シコクメクラヨコエビ；1(VII), 1(XII)：文献(3,25)
11. *Potamon(Geothelphusa)dehaani* WHITE サワガニ；1(I)：文献(25)
12. Gen.sp.（カニムシ類）；2(VII), 8(XI)
13. *Leptoneta* sp.（マシラグモ属）八木沼；7(XII)
14. *Conoculus lyugadinus* KOMATSU ヨリメグモ；1(VII)
15. *Nesticus* sp.（ホラヒメグモ属，東型）八木沼；3(V), 7(VI), 1(VII), 7(XII)：文献(10)
16. **Cybaeus ryunoiwayaensis* KOMATSU リュウノイワヤナミハグモ，小松； 1(VI),4(XII)：文献(8)
17. Gen.sp.（メクラグモ類）；1(VII), 1(VIII)
18. *Androlaelaps* sp.（ダニ類）石川；3(XII)
19. *Leptolaelaps* sp.（ダニ類）石川；5(XII)
20. *Macrocheles* sp.（ダニ類）石川；2(XII)
21. *Uroobovella* sp.（ダニ類）石川；4(XII)
22. *Parasitus* sp.（ダニ類）石川；11(VII)
23. Gen. sp.（ミズダニ類）森本；8(XII)
24. **Epanerchodus acuticlivus* MURAKAMI (in press) リュウオビヤスデ，村上；2(VI), 90(VII), 22(IX), 4(X), 5(XI), 7(XII)
25. **Epanerchodus aster* MURAKAMI (in press) ホシオビヤスデ，村上；6(XII)
26. *Epanerchodus* sp.（オビヤスデ属，洞外種）村上；1(I)
27. *Hyleoglomeris* sp.（タマヤスデ属）村上；1(V), 1(VI), 9(VII), 3(XI), 6(XII)
28. *Esastigmatobius longicornis* TAKAKUWA オオゲジムカデ，村上；3(VI), 2(VII), 5(XII)
29. *Bothropolys* sp.（イッスンムカデ属）村上；3(VII), 1(XI)
30. Genn. spp.（トビムシ類数種）；30(VII)：文献 (12, 13, 25)　なお，吉井 (1956) の文献 (12) には，*Isotomurus alticolus japonicus* YOSII, *Sinella* (*Coecobrya*) *ishikawai* YOSII, *Homidia munda* YOSII, *Plutomurus suzukaensis naikaiensis* YOSII の4種が本洞から記録されている。
31. Gen. sp.（カゲロウ類，幼虫）森本；1(XII)
32. *Galloisiana* sp.（ガロアムシ属，幼虫）；1(I), 2(V), 2(VI), 2(VII)
33. *Diestrammena* sp.（カマドウマ科）；1(XI), 2(XII)：文献(25)
34. Gen. sp.（ハサミムシ科）；1(XII)

35. *Dinumma deponens* WALKER ウスズマクチバ；2(XI)

36. *Scoliopteryx libatrix* LINNÉ ハガタキリバ；1(XII)

37. Genn. spp.（双翅目，数種）；10(XI)，15(XII)

38. Gen. sp.（ユスリカ科，幼虫）森本；4(XII)

39. *Penicillida jenynsi* WESTWOOD ケブカクモバエ；1(XI)：文献(25)

40. *Brachytarsina kanoi* MAA コウモリバエ；3(I)

41. *Awatrechus hygrobius* S.UÉNO リュウノメクラチビゴミムシ，上野；6(I)，10(V)，7(VI)，8(VII)，3(VIII)，3(X)，3(XI)，12(XII)：文献（17，19，20，23，25，27，28）

42. *Colpodes kyushuensis*（HABU）チャイロホソヒラタゴミムシ，上野；1(VI)，1(XII)

43. *Hikosanoagonum shirozui*（HABU）シロウズモリヒラタゴミムシ，上野；1(VI)

44. *Nemadus* sp.（ヒメチビシデムシ属）；4(I)，3(VIII)

45. *Catops ohbayashii* JEANNEL オオバヤシチビシデムシ；2(V)，24(VI)，54(VII)，3(VIII)，2(X)，43(XII)

46. **Quedius kiuchii* Y.WATANABE et M.YOSHIDA（ツヤムネハネカクシ属）渡辺；1(I)，1幼虫(I)，4幼虫(VII)，1(XI)，3幼虫(XII)：文献(24)

47. Gen. sp.（アリヅカムシ科）；1(VII)

48. *Speobatrisodes punctaticeps* JEANNEL（アリヅカムシ科）；1(V)，1(VII)，1(XII)

49. *Ordobrevia maculata* NOMURA カタモンミゾドロムシ；2(XII)；文献（18,25）

50. Gen. sp.（アリ科）；2(VII)

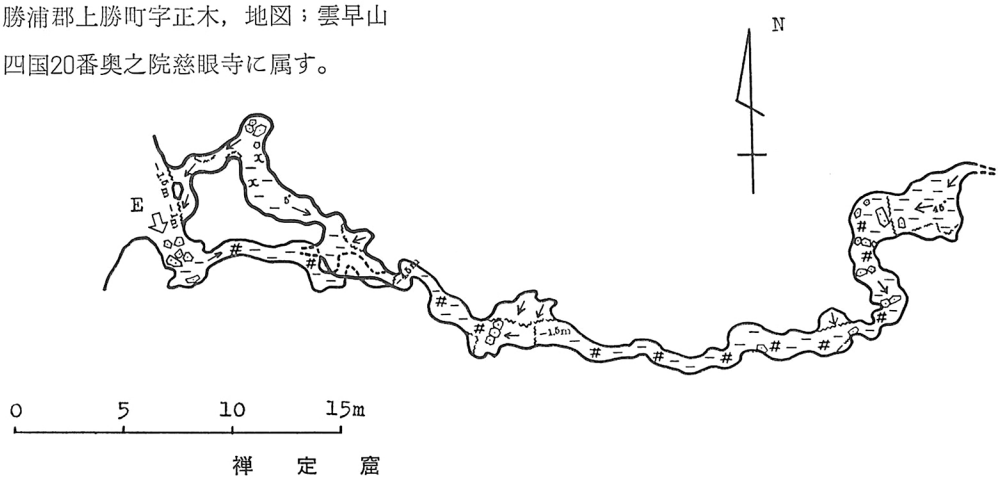
51. *Rhinolophus ferrumequinum nippon* TEMMINCK ニホンキクガシラコウモリ，2(XII)：文献（25，27）

52. *Miniopterus schreibersi fuliginosus* HODGSON ニホンユビナガコウモリ，2(XII)：文献（27）

2 禪 定 窟 (Zenjō-kutsu Cave)

勝浦郡上勝町字正木，地図；雲早山

四国20番奥之院慈眼寺に属す。



禪 定 窟

剣山層群（古生代二畳紀前〜中期）

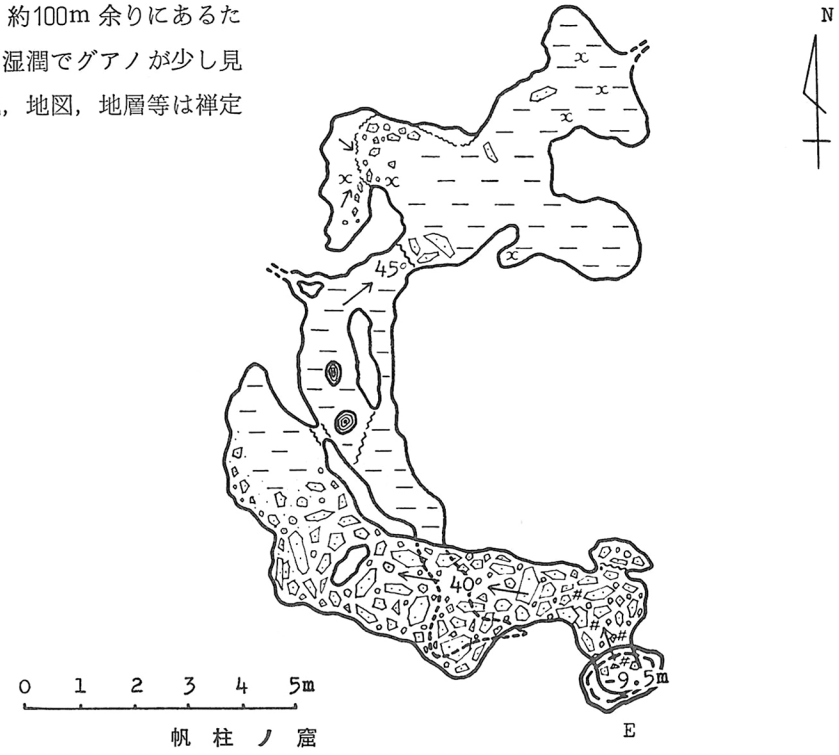
標高約650mの地点にあり，古くより信仰の対象とされ，千丈ノ窟，潅頂ノ窟とも呼ばれる。洞口高さ2.3m，幅2.0m，亀裂型の横穴で洞の幅は人がようやく通れるていどである。上下二層に分れ，数個所に溜水がある。信者や観光客の出入りにより有機物の量は比較的多い。

1. *Leptoneta zenjoensis* KOMATSU ゼンジョウマシラグモ，小松；1(V),42(VI),26(VII),1(XI)：文献(6,7)
2. *Nesticus* sp.（ホラヒメグモ属，西型）八木沼；8(V)，7(VI)，5(VII)
3. *Cybaeus kiuchii* KOMATSU キウチナミハグモ，小松；2(VI),5(VII),1(XI)：文献(6,8)
4. *Heteropoda*（KARSCH）コアシダカグモ；3(XI)
5. *Pseudobiantes japonicus* HIRST ニホンアカザトウムシ；1(XI)
6. Gen. sp.（ダニ類）；1(VI)，1(VII)
7. *Skleroprotopus inferus* VERHOEFF リュウガヤスデ，村上；2(I)，4(VI)，1(XI)
8. **Epanerchodus biaduncus* MURAKAMI ゼンジョウオビヤスデ，村上；1(V)，16(VI)，9(VII)，1(XI)，：文献(11)
9. *Epanerchodus* sp.（オビヤスデ属，洞外種）村上；1(I)，1(V)，2(VI)，1(VII)
10. *Hyleoglomeris* sp.（タマヤスデ属）村上；6(VI)，1(XI)
11. *Monotarsobius* sp.（ヒトフシムカデ属）村上；1(VI)
12. *Onychiurus*（*Protaphorura*）*ishikawai* YOSII（トビムシモドキ科）吉井；14(VI)
13. *Onychiurus* sp.（トビムシモドキ科）吉井；3(VI)
14. *Folsomia candida* WILLEM（フシトビムシ科）吉井；16(VI)
15. *Sinella*（*Coecobrya*）*ishikawai* YOSII（ツノトビムシ科）吉井；88(VI)
16. *Plutomurus riugadoensis*（YOSII）リュウガドウトゲトビムシ，吉井 243(VI)
17. *Plutomurus kawasawai* YOSII（トゲトビムシ科）吉井；3(VI)
18. *Plutomurus* sp.（トゲトビムシ科）吉井；4(VI)
19. *Plutomurus* sp.（トゲトビムシ科）吉井；5(VI)
20. *Tomocerus*（*Monodontocerus*）*modificatus* YOSII（トゲトビムシ科）吉井；122(VI)
21. *Arrhopalites* sp.（マルトビムシ科）吉井；1(VI)
22. *Galloisiana* sp.（ガロアムシ属）；1(I)：文献(16，29)
23. *Diestrammena* sp.（カマドウマ科）；2(VI)
24. *Awatrechus religiosus* S.UÉNO ゼンジョウメクラチビゴミムシ，上野；1(I)，3(VI)，6(VII)，3(XI)：文献（17，21，23，27，28，29，30)
25. *Jujiroa* sp.（ホラアナナガゴミムシ属）上野；3(VI)：文献(27)
26. Gen. sp.（コケムシ科）；1(VI)
27. *Catops ohbayashii* JEANNEL オオバヤシチビシデムシ；1(I)
28. *Quedius* sp.（ツヤムネハネカクシ属，幼虫）；1(V)
29. Gen. sp.（アリヅカムシ科）；1(VII)

30. *Speobatrisodes punctaticeps* JEANNEL（アリヅカムシ科）沢田；5(VI)，11(VII)，4(XI)

3　帆柱ノ窟 (Hobashira-no-iwaya Cave)

禅定窟の東，約100m余りにあるたて穴で，奥部は湿潤でグアノが少し見られる。所在地，地図，地層等は禅定窟に同じ。



帆柱ノ窟

1. *Leptoneta zenjoensis* KOMATSU ゼンジョウマシラグモ；4(VII)
2. *Nesticus* sp.（ホラヒメグモ属，西型）；2(VII)
3. *Cybaeus kiuchii* KOMATSU キウチナミハグモ；1(VII)
4. Gen. sp.（ダニ類）；1(VII)
5. *Epanerchodus biaduncus* MURAKAMI ゼンジョウオビヤスデ，村上；1(VII)，6幼生(VII)
6. Genn. spp.（トビムシ類数種）；9(VII)
7. *Awatrechus religiosus* S.UÉNO ゼンジョウメクラチビゴミムシ；1(VII)
8. *Jujiroa* sp.（ホラアナナガゴミムシ属）上野；2(VII)
9. *Catops ohbayashii* JEANNEL オオバヤシチビシデムシ；5(VII)
10. *Speobatrisodes punctaticeps* JEANNEL（アリヅカムシ科）；3(VII)
11. *Triturus pyrrhogaster pyrrhogaster* BOIE イモリ；5目撃 (VII)

以上のほかに，シカ・アナグマ・ノウサギ・ネズミ・モグラ等の骨片を採集した(VII)。

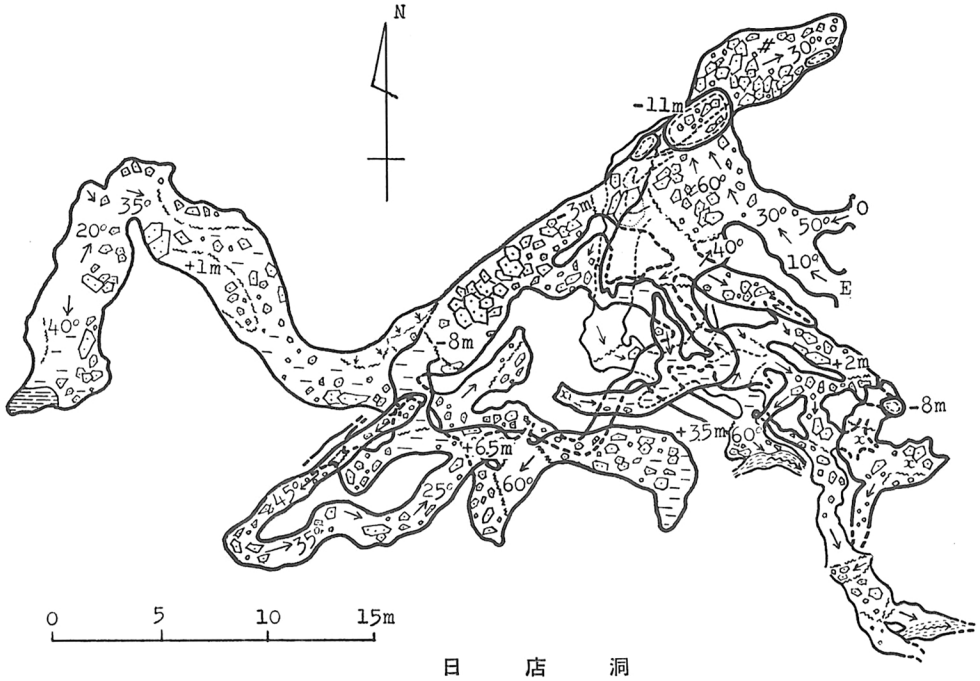
4　日店洞 (Himise-dō Cave)

那賀郡上那賀町長安字平瀬山12の3番，地図；桜谷，平瀬只蔵氏（日店在住）所有。

宮浜層群（古生代二畳紀前期）

昭和28年に新道路開通工事中に発見された洞で，国道195号線のすぐ傍に開口する。国道の片側は

那賀川の本流で，長安口ダムの貯水池となっている。断層に沿って発達した横穴であるが上下に分岐する支洞が何層にも重なり連なって，ひじょうに複雑な迷路状となっている。ダムの水位の影響を直接受けるので，渇水期は下層部に流水が見られるが，豊水期は下層部が水没してしまう。外部との通気口が多いらしく，主洞は外部気温の影響を受けやすい。例えば１月で洞外気温7.2°Cの時，主洞中央の気温8.0°C，入口上部の支洞で15.0°Cを示した。流水のpH7.6，水温は14.6°C（12月末）。有機物が乏しく，洞窟動物の棲息環境として好い状態であるとはいいがたい。



日　店　洞

1. Gen. sp.（イトミミズ科）森本；1(XII)
2. *Bythinella* (*Moria*) *nipponica* MORI ホラアナミジンニナ（基亜種）波部；11(XII)
3. *Cavernacmella* cf. *kuzuuensis* (SUZUKI) ホラアナゴマオカチグサ近似種，波部；1(II)
4. *Chamalycaeus pilsbryi* (KOBELT) ピルスブリムシオイ，波部；3(VIII)
5. *Fossaria* cf. *truncatula* (MÜLLER) コシダカヒメモノアラガイ近似種，波部；1(VIII)
6. Gen. sp.（ケンミジンコ類）森本；26(XII)
7. Gen. sp.（ソコミジンコ類）森本；19(XII)
8. Gen. sp.（カイミジンコ類）森本；70(XII)
9. Gen. sp.（ミズムシ科）森本；2(XII)
10. *Hyloniscus uenoi* VANDEL アワメクラワラジムシ，VANDEL；4(I)，1(V)，1(VI)，2(VII)，1(VIII)，1(XI)，2(XII)：文献(2,26)
11. *Pseudocrangonyx* sp.（メクラヨコエビ属）；1(VIII)，2(V)

12. **Awacaris kawasawai* UÉNO (in press) アワメクラヨコエビ，上野益三；10(IV)，約100(XII)
13. *Potamon* (*Geothelphusa*) *dehaani* WHITE サワガニ；1(VIII)
14. *Allochthonius* sp.（ツチカニムシ属）；1(I)，5(II)，3(VI)，1(XII)
15. *Leptoneta* sp.（マシラグモ属）；8(IV)，3(V)，1(VII)，6(XII)
16. *Nesticus* sp.（ホラヒメグモ属，東型）八木沼；7(V)，5(VI)，2(VII)，2(XII)
17. *Cybaeus* sp.（ナミハグモ属）；1(IV)，1(VI)，1(XII)
18. *Heteropoda forcipata* (KÄRSCH) コアシダカグモ；3(IV)
19. Gen. sp.（ダニ類）；1(IV)
20. Gen. sp.（ミズダニ類）森本；2(XII)
21. **Epanerchodus kiuchii* MURAKAMI キウチオビヤスデ，村上；4(I)，11(IV)，3(VII)，6(VIII)，2(XII)：文献(11)
22. *Skleroprotops inferus* VERHOEFF リュウガヤスデ，村上；2(I)，3(IV)，1(VI)，1(VII)，1(VIII)
23. *Onychiurus* (*Deuteraphorura*) *folsomi* SCHÄFFER（トビムシモドキ科）吉井；3(IV)
24. *Onychiurus* (*Protaphorura*) *ishikawai* YOSII（トビムシモドキ科）吉井；4(IV)
25. *Folsomia candida* WILLEM（フシトビムシ科）吉井；4(IV)
26. *Sinella* (*Coecobrya*) *ishikawai* YOSII（ツノトビムシ科）吉井；24(IV)
27. *Willowsia bimaculata* BÖRNER（ツノトビムシ科）吉井；1(IV)
28. *Plutomurus suzukaensis* YOSII（トゲトビムシ科）吉井；15(IV)
29. *Tomocerus* (*Monodontocerus*) *modificatus* YOSII（トゲトビムシ科）吉井；9(IV)
30. *Tomocerus* (s. str.) *ocreatus* DENIS（トゲトビムシ科）吉井；8(IV)
31. *Galloisiana* sp.（ガロアムシ属）；1(VI)，1(VIII)
32. *Diestrammena apicalis* BRUNNER カマドウマ，上野；3(VI)，1(VIII)
33. *Apamea sodalis* BUKTLER チャイロカドモンヨトウ；1(VIII)
34. Genn. spp.（双翅目数種）；多数(II，IV，V，VI，VIII，XII)
35. *Penicillida jenynsi* WESTWOOD ケブカクモバエ；1(XII)
36. **Ryugadous* (s. str.) *awanus* S. UÉNO ヒミセメクラチビゴミムシ，上野；2(II)，2(VI)，1(VIII)；文献(22)
37. **Ryugadous* (*Himiseus*) *kiuchii* S. UÉNO キウチメクラチビゴミムシ，上野；1(I)，3(VI)，1(VII)，1(VIII)，1(XII)：文献(22)
38. **Awatrechus yoshidai* S. UÉNO ヨシダメクラチビゴミムシ，上野；7(I)，6(V)，4(VI)，2(VIII)，3(XII)：文献(23)
39. *Jujiroa* sp.；（ホラアナナガゴミムシ属）上野；1(II)，4(VIII)
40. *Catops ohbayashii* JEANNEL オオバヤシチビシデムシ 1(I)，2(II)，4(IV)，2(V)，3(VI)，5(VII)，1(VIII)，1(XII)

41. *Ptomaphagus* sp.（チビシデムシ科）上野；2(VI)

42. *Nemadus* cf. *japanus* COIFFAIT et S.UÉNO（チビシデムシ科）2(VI), 3(VII)

43. *Oxtelus* sp.（ハネカクシ科）；4(VIII)

44. *Speobatrisodes punctaticeps* JEANNEL（アリヅカムシ科）；6(I), 1(IV), 1(V), 1(VI), 4(VII), 4(VIII), 2(XII)

45. Gen. sp.（コケムシ科）；1(V)

46. Gen. sp.（アリ科）；1(VII)

47. *Zacco platypus*（TEMMINCK et SCHLEGEL）オイカワ；1(II)

48. *Rhinolophus ferrumequinum nippon* TEMMINCK ニホンキクガシラコウモリ；1(XII)

49. *Rhinolophus cornutus cornutus* TEMMINCK ニホンコキクガシラコウモリ；5(I), 2(XII)

5 大 戸 洞（Ōto-dō Cave）

那賀郡上那賀町大戸，地図；桜谷

春森層群（中生代三畳紀～ジュラ紀）

那賀川をはさんで日店洞の対岸やや上流寄りの標高500m余の位置にある。風化のはげしい老年期の横穴で，奥行は約15mほどであったと記憶している。奥は落石で埋まっている。

1. *Epanerchodus kiuchii* MURAKAMI キウチオビヤスデ，村上；2(VIII)

2. *Onychiurus* sp.（トビムシモドキ科）吉井；1(VIII)

3. *Tomocerus* sp.（トゲトビムシ科）吉井；1(VIII)

4. *Apamea sodalis* BUKTLER チャイロカドモンヨトウ；1(VIII)

6 権 現 洞（Gongen-dō Cave）

那賀郡木沢村坂州，地図；桜谷

三滝火成岩の高丸山中腹にある石灰露岩に開口する。標高約560m，老年期の洞でかなり乾燥している。洞口から直ちに約10mのチムニー状の上りとなり，そこからはほとんど水平の回廊状となる。コウモリは多く棲息する。

1. *Oxidus gracilis* KOCH ヤケヤスデ，村上；4(VIII)

2. *Epanerchodus* sp.（オビヤスデ属）村上；1(VIII)

3. *Skleroprotopus* sp.（リュウガヤスデ属）村上；1(VIII)

4. *Catops ohbayashii* JEANNEL オオバヤシチビシデムシ；多数（VIII)

5. Gen. sp.（アリ科）；多数目撃（VIII)

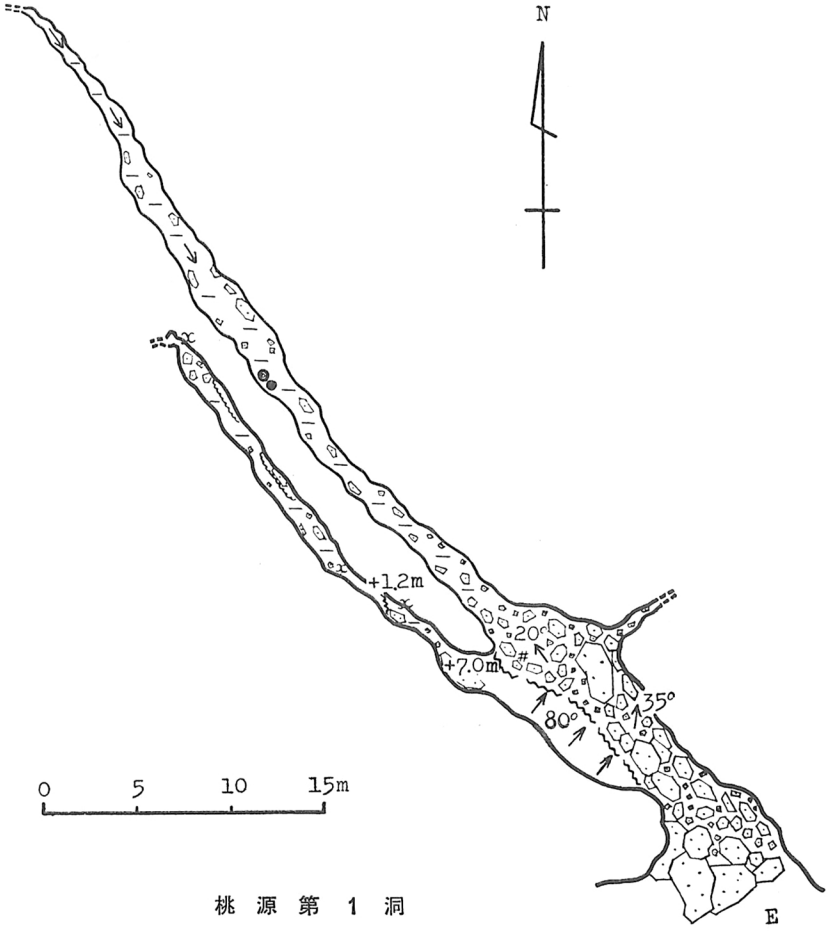
6. *Rhinolophus cornutus cornutus* TEMMINCK ニホンコキクガシラコウモリ；多数目撃（VIII)

7 桃源第一洞（Tōgen-daiichi-dō Cave）

那賀郡木沢村高野，地図；雲早山

沢谷層群（古生代二畳紀前～中期）

ヒズカ山の中腹，標高約900mの位置に高さ５m，幅７mの洞口を開く。 昭和30年に地元の井地岡武春氏らによって発見され，木沢洞とも呼ばれる。亀裂型の横穴で上下二層に分れそれぞれ直線状にのびる。 鍾乳石や石筍が少しあるが，かなりこわした跡がある。 ８月の 洞外気温 22.5°Cの時，上洞19.5°C，下洞14.3°Cであった。上下ともに奥半分は湿潤である。



桃 源 第 1 洞

1. *Hyloniscus uenoi* VANDEL アワメクラワラジムシ，VANDEL；2(VIII)：文献(2,26)
2. *Allochthonius* sp.（ツチカニムシ属）；9(VIII)
3. *Leptoneta* sp.（マシラグモ属）；1(VIII)
4. *Nesticus* sp.（ホラヒメグモ属，東型）八木沼；2(VIII)
5. *Cybaeus* sp.（ナミハグモ属）；1(VIII)
6. **Epanerchodus masatakai* MURAKAMI (in press) トウゲンオビヤスデ，村上；11(VIII)
7. *Epanerchodus* sp.（オビヤスデ属，洞外種）村上；1(VIII)
8. *Skleroprotopus inferus* VERHOEFF リュウガヤスデ，村上；5(VIII)：文献(27)
9. Genn. spp.（トビムシ類数種）；多数（VIII)

10. *Awatrechus pilosus* S. UÉNO トウゲンメクラチビゴミムシ，上野；4(VIII)：文献(17，20，23，27)

11. *Speobatrisodes punctaticeps* JEANNEL （アリヅカムシ科）；5(VIII)

12. Gen. sp.（アリヅカムシ科）；1(V)，1(VIII)

13. *Rhinolophus ferrumequinum nippon* TEMMINCK ニホンキクガシラコウモリ；1(VIII)

8 桃源第2洞（Tōgen-daini-dō Cave）～ 第4洞

第2洞は深さ20m，洞口約5m×8mのたて穴で生物は少い。第1洞の南東約350mにある。

第3洞は第2洞の北東約50mにあり，洞長約30m余の乾燥した横穴であるが，ガロアムシ採集の記録がある，文献（14，21，27）。

1. *Nesticus* sp.（ホラヒメグモ属，西型）八木沼；3(VIII)

2. *Awatrechus pilosus* S. UENO トウゲンメクラチビゴミムシ；1(VIII)：文献(27)

3. *Sepedophilus* sp.（ハネカクシ科）；1(VIII)

第4洞は深さ18mのたて穴で入口は狭いが底部は直径約10mほどの広がりがある。

1. *Hyloniscus uenoi* VANDEL アワメクラワラジムシ；2(VIII)

2. *Epanerchodus* sp.（オビヤスデ属，洞外種）；(VIII)

3. *Achalinus spinalis* (PETERS) タカチホヘビ；2(VIII)

なお更に700mほど北にある深さ15mほどの無名の小さなたて穴で *Meta menardi* (LATREILLE) サンロウドヨウグモの成熟した1♂，1♀(XI)を採集した。周辺にはまだ幾つかの小洞がありそうである。

9 明神第1洞（Myōjin-daiichi-dō Cave），第2洞

那賀郡木沢村小畠，地図；雲早山

沢谷層群（古生代二畳紀前～中期）

第1洞は標高約650m，洞口は高さ2.2m，幅3.3mで南面する。総洞長約45m，老年期の横穴で比較的乾燥している。明神ノ窟とも呼ばれ，洞口に祠がある。 8月の洞外気温24.2°Cのとき洞内気温14.1°Cであった。

1. Gen. sp.（カニムシ類）；3(VIII)

2. *Leptoneta* sp.（マシラグモ属）；17(VIII)

3. *Nesticus* sp.（ホラヒメグモ属，東型）八木沼；6(VIII)

4. Gen.sp.（メクラグモ類）1(VIII)

5. Gen. sp.（ダニ類）；1(VIII)

6. *Epanerchodus* sp.（オビヤスデ属）村上；10(VIII)

7. Genn. spp.（トビムシ類数種）；9(VIII)

8. *Dinumma deponens* WALKER ウスヅマクチバ；1(VIII)

9. *Catops ohbayashii* JEANNEL オオバヤシチビシデムシ；1(VIII)

10. *Sepedophilus* sp.（ハネカクシ科）；1(VIII)

第２洞は第１洞の南東約200m，標高約600m，洞口高さ1.2m，幅0.8mの狭い横穴で奥行約40m余，溜水２個所，グアノ少々あり。

1. *Trochochlamys sororcula* (PILSBRY et HIRASE) トサキビ，波部；1(VIII)
2. *Leptoneta* sp.（マシラグモ属）；1(VIII)
3. *Nesticus* sp.（ホラヒメグモ属）；1(VIII)
4. *Conoculus lyugadinus* KOMATSU ヨリメグモ；1(VIII)
5. Gen. sp.（ダニ類）；1(VIII)
6. *Epanerchodus* sp.（オビヤスデ属）村上；7(VIII)
7. *Epanerchodus orientaris* ATTEMS ヒガシオビヤスデ，村上；1(VIII)
8. Genn. spp.（トビムシ類数種）；23(VIII)
9. Genn. spp.（双翅目数種）；多数(VIII)
10. *Awatrechus* cf. *pilosus* S. UÉNO トウゲンメクラチビゴミムシ?; 1(VIII)
11. *Catops ohbayashii* JEANNEL オオバヤシチビシデムシ；3(VIII)
12. *Nemadus* sp.（チビシデムシ科）；3(VIII)
13. *Oxytelus* sp.（ハネカクシ科）；1(VIII)
14. *Sepedophilus* sp.（ハネカクシ科）；3(VIII)
15. Gen. sp.（アリ科）；2(VIII)

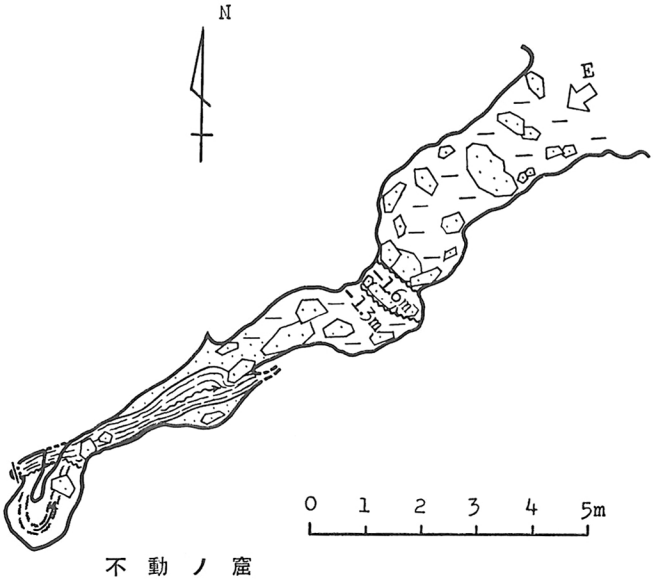
10 不動ノ窟

麻植郡木屋平村両剣谷，地図；剣山

剣山層群（古生代二畳紀前～中期）

剣山頂上より北斜面をやや下った標高約1800mの地点にあり，本邦の既知鍾乳洞中もっとも高所に位置する洞である。古くから剣山信仰の行場として知られている。亀裂型の若い洞で内部の流水は四季を通じて豊富である。

測定月	4 月	5 月	8 月
洞内気温	2.5	5.6	11.0
洞内水温	6.0	6.5	8.2
洞外気温	3.5	10.5	18.8



不動ノ窟

1. *Phagocata vivida* (IJIMA et KABURAKI) ミヤマウズムシ，川勝；多数(V)
2. Gen. sp.（ケンミジンコ科）；多数(V)
3. *Pseudocrangonyx* sp.（メクラヨコエビ属）；5(VIII)

4. Gen. sp.（カニムシ類）；1(VII)
5. *Nesticus* sp.（ホラヒメグモ属，東型）八木沼；2(V)，1(VII)，1(VIII)
6. *Meta menardi*（LATREILLE）サンロウドヨウグモ，八木沼；2(V)
7. *Arcuphantes* cf. *osugiensis*（OI）オオスギヤミグモ類似種，八木沼；1(V)
8. Gen. sp.（ダニ類）；1(VIII)
9. *Galloisiana* sp.（ガロアムシ属）；1(V)：文献(15，21)
10. *Scoliopteryx libatrix* LINNÉ ハガタキリバ；1(IV)
11. *Trechiama*（*Pseudotrechiama*）*chikaichii* S. UÉNO ケンザンメクラチビゴミムシ；1(V)，1(VII)：文献(21，27，28)
12. *Plecotus auritus sacrimontis* G. ALLEN ウサギコウモリ；4(VIII)

11 西 宇 洞（Nishiu-dō Cave）

那賀郡木頭村西宇，地図；北川

若杉層群（古生代二畳紀中〜後期）

八早山の中腹，標高約900mにある老年期の横穴で，風化がはげしく，奥行20m余で落石のため埋まっている。

1. *Ligidium japonicum* VERHOEFF ヒメフナムシ，VANDEL；1(VIII)
2. Gen. sp.（カニムシ類）；1(VIII)
3. *Epanerchodus* sp.（オビヤスデ属）村上；2(VIII)
4. *Skleroprotopus* sp.（リュウガヤスデ属）村上；2(VIII)
5. *Plutomurus* sp.（トゲトビムシ科）吉井；1(VIII)
6. *Tomocerus ochleatus* DENIS（トゲトビムシ科）吉井；1(VIII)

12 折宇第1洞（Oriu-daiichi-dō Cave），第2洞

那賀郡木頭村折宇，地図；北川

若杉層群（古生代二畳紀中〜後期）

ともに折宇谷に面した標高約650mの地点にある狭い横穴である。

第1洞は洞長約50m，洞口高さ1.5m，幅0.8mで西南西に面し，洞奥部はかなり水量のある地下水路となって更にのびているようである。

1. Gen. sp.（ナガコムシ科，幼虫）；1(VII)
2. *Nesticus* sp.（ホラヒメグモ属，東型）八木沼；1(VII)
3. *Heteropoda forcipata*（KARSCH）コアシダカグモ，八木沼；1(VII)
4. Gen. sp.（メクラグモ類）；2(VII)
5. *Epanerchodus* sp.（オビヤスデ属），；10(VII)
6. *Epanerchodus* sp.（オビヤスデ属，洞外種）；1(VII)

第2洞は第1洞より100mほど下流にあり，洞長16mでほぼ直線状。4月の洞外気温12.3°Cの時，

最奥で11.8°Cであった。湿っているが水流や溜水はない。

1. Gen. sp.（カニムシ類）；1(IV)
2. *Nesticus* sp.（ホラヒメグモ属，東型）八木沼；9(IV)
3. *Epanerchodus* sp.（オビヤスデ属，洞外種）；2(IV)
4. Genn. spp.（トビムシ類数種）；5(IV)
5. *Jujiroa* sp.（ホラアナナガゴミムシ属）；1(IV)
6. *Catops ohbayashii* JEANNEL オオバヤシチビシデムシ；5(IV)
7. *Quedius* sp.（ツヤムネハネカクシ属，洞外種）；2(IV)
8. *Speobatrisodes punctaticeps* JEANNEL（アリヅカムシ科）；5(IV)

13 千 畳 敷 (Senjō-jiki)

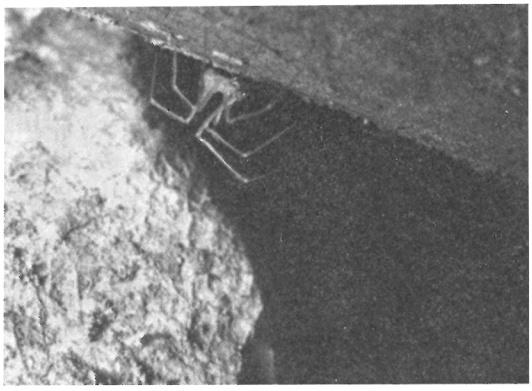
名西郡神山町下分字三ツ木，地図；雲早山

結晶片岩のクレバス状の穴で，洞とはいいがたいがホラヒメグモやダニグモなどの記録があるので，特にここにとり上げた。内部は乾燥しているがグアノは比較的多い。

1. *Nesticus* sp.（ホラヒメグモ属，西型）；2(XI)
2. *Gamasomorpha kusumii* KOMATSU クスミダニグモ，小松；1(XI)：文献(5，7)
3. *Heteropoda forcipata*（KARSCH）コアシダカグモ；1(XI)
4. *Uloborus* sp.（ウズグモ属，洞外種）；1(XI)

本県洞窟動物相の特徴

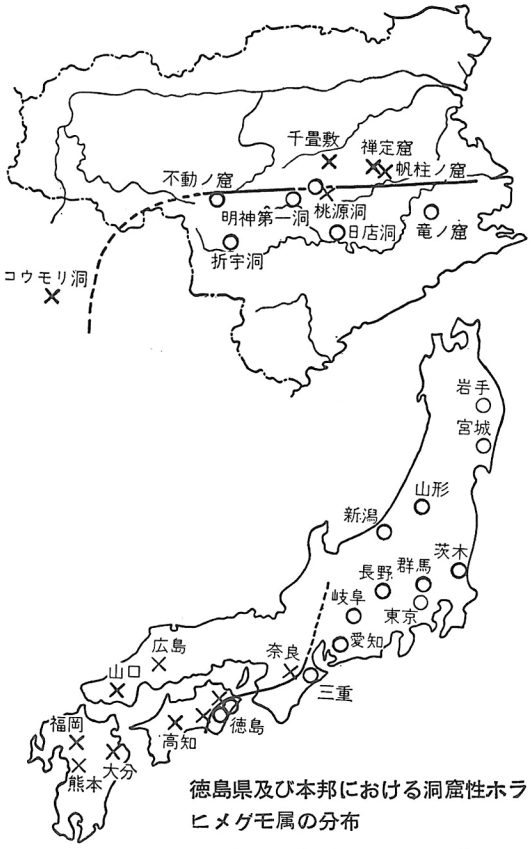
(1) 本県の洞窟動物相が隣接する高知県側のそれと系統的にほとんど差異がないであろうと考えていた筆者らの調査前の予想に反して，調査が進むにつれて両者の間には大きなちがいのあることが次第に明らかとなって来た。



竜の窟のホラヒメグモ（*Nesticus* sp.）

たとえば，洞窟性ホラヒメグモ属は，北上山系から九州・韓国まで広く分布するが，各地の標本を比較検討することによって，東日本型の系統と西日本型の系統とに大きく二分されることが，八木沼健夫氏の研究によって明らかになった。この見解にもとづいて本県の洞窟性ホラヒメグモ属を調べてみると，竜ノ窟・日店洞・桃源第1洞・明神第1洞・不動ノ窟・折宇洞産は何れも東日本型のもの，禅定窟・桃源第3洞・千畳敷・コウモリ洞（高知県香美郡香北町。竜河洞の北東約10Kmにあたる高知県東部の洞）のそれはいずれも西日本型のもので，東西二型のホラヒメグモがほぼ本県の南と北とに分れて棲息していることがわかった。前者を○で，後者を×で地図上にプロットすると図のようになる。ここで桃源の諸洞では両者の分布が接触しているらしく，洞ごとにいずれかの系統の種で占められているようであるが，分布地点

は入り組んで明瞭には分け難い。けれども本邦のホラヒメグモの二系統の分布を分ける境界線が本県の中央部をほぼ東西に走っていることが推察でき，更に高知県産のそれがいずれも西日本型であることから，本県が東日本型ホラヒメグモ属の西南限となっていると考えられる。なお，この分布境界線を八木沼氏は下図のように考えておられる（昭和44年東亜蜘蛛学会大会講演テキストを参考にした）。



徳島県及び本邦における洞窟性ホラヒメグモ属の分布

（○東日本型，×西日本型）

また洞窟性のナミハグモ属に関する小松敏宏氏の報文（文献８）によると，本属の種は東京・山梨・岐阜・徳島等で発見され高知県竜河洞以西は近縁ではあるが別属のズナガグモ属に替ってしまう。ここにもホラヒメグモ属に似た分布の境界を見ることができる。

更に洞窟性のオビヤスデ属にも同じような分布状態のあることがわかって来た。村上好央氏の研究によって今回記載された前記５種のオビヤスデはいずれも東日本系統のものであって，竜河洞以西の同属種とは明らかに系統を異にしていることが確かめられた。甲虫類でも不動ノ窟とその周辺の石下から見つかる好洞窟性のケンザンメクラチビゴミムシは，同属の種が四国で他のどこからも発見されておらず，三重・愛知・静岡・東京等に分布する系統のものであることが上野俊一氏の研究（文献21）によって知られている。

以上の諸事例に見られるように，本県の洞窟動物は，隣接する高知・愛媛のものよりも，海をへだてた紀伊半島から東海・関東にのびる，いわゆる東部日本系統のものが多く，本県がほぼその西南の分布境界に位置しているという興味深い事実がわかって来た。

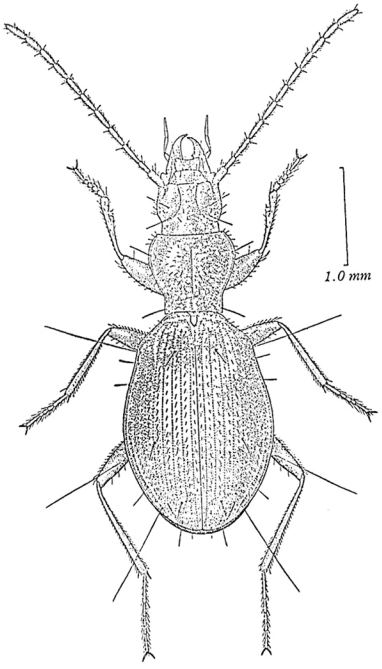
しかしながら，これらの事例だけで本県の洞窟動物の全てが高知以西のそれと系統的に切り離されるものとすることはできない。相方に共通乃至は密接なつながりを持った種は決して少くはない。例えば日店洞で発見された３種のメクラチビゴミムシのうち，２種は高知県竜河洞とその周辺の洞を基産地とする *Ryugadous* 属に属するものである。このことは，今日 *Ryugadous* 属として知られる各種に共通した祖先が，まだ洞窟に定着せず地表種であった時代には，竜河洞周辺から日店洞付近にかけての地域一帯に広く分布していたと考えるべきであろう。また後述するように，特異な真洞窟性の陸棲等脚類の *Hyloniscus* も，はじめ本県の洞だけから知られていたが，高知県コウモリ洞にも棲息することが最近になって確認された。これらの例に見られる高知側との系統上のつながりは，前述の

諸例から導かれる結論と全くあい反するようであるが，その理由は容易に推察できる。現在の洞窟動物が，古い祖先の時代から世代を繰り返して来た今日までの永い地史的年代の中で，洞窟の中に入って地表種から洞窟種として定着して行った時代は動物群によってそれぞれ異っている筈である。

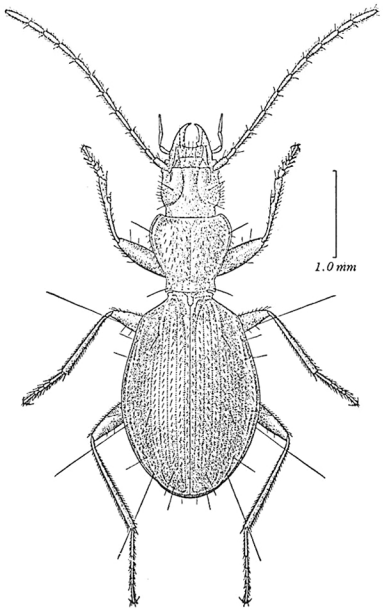
従って，それぞれの時代における地形や気象条件がひどく異った状況にあったとすれば，一つの洞にある系統のある動物が定着した後で，異った系統の他のグループの動物が入り込むという現象があっても不思議ではない。

何れにせよ本県の洞窟動物相を考えるばあいに，高知県側との関連を充分に考慮しなければならないことは当然であるが，その特徴をとらえるばあいに，東日本系統の動物分布の西南限界にあたっている多くの例が見られることは重視されるべきであって，この点では高知県側と区分されてしかるべきものといえよう。大野ケ原カルスト地域を中心とする四国西部のブロックに対して，「四国東部ブロック」と呼ぶに足るだけの意義はあると考えている。もちろんこれは概念的な表現であって明確な境界線を引くべき性格のものではない。ただ，日店洞から竜河洞にいたる50Km余りの地域は，現在のところ小規模な数洞が知られているに過ぎず，これらの洞から得られている資料も乏しいが，今後この地域の調査を進めることによって一層詳細な動物相の解明がなされねばならない。

(2) 日店洞にはメクラチビゴミムシの3種，ヒミセメクラチビゴミムシ *Ryugadous* (s. str.) *awanus*，キウチメクラチビゴミムシ *R.* (*Himiseus*) *kiuchii* および ヨシダメクラチビゴミムシ *Awatrechus yoshidai* が混棲しているが，一般に真洞窟性動物のばあいに一つの洞では同属の近縁種

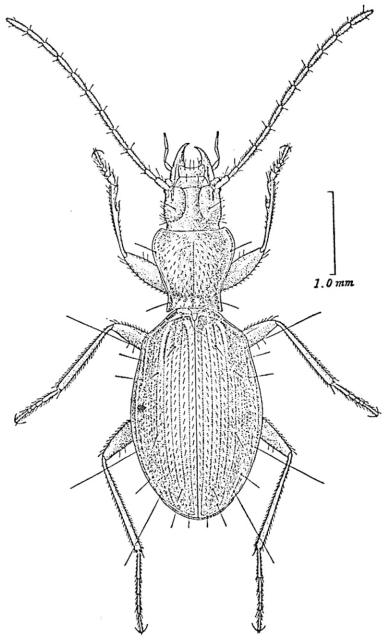


Ryugadous (s.str.) *awanus* S.UÉNO
ヒミセメクラチビゴムシ
(上野原図)



Ryugadous (*Himiseus*) *kiuchii* S.UÉNO
キウチメクラチビゴミムシ
(上野原図)

が混棲することはきわめて稀なことである。殊に西日本外帯の洞窟では種の分化が著るしく洞ごとに別の種を形成していることが多い。その中にあって日店洞が同属（亜属を異にするが）の２種と比較的近縁な別属の１種との混棲を許し，しかも彼らがなんら棲み分けることもなく棲息していることは特異な事例というべきであろう。もしいささか大胆な推察が許されるならば，その成因について次のように考えることもできる。前述したように，彼らの祖先がまだ地表種であった頃，*Ryugadous* 属が西方から日店洞付近にまで分布し，いっぽう今日竜ノ窟・禅定窟・桃源洞に見られる *Awatrechus* 属の祖先が東方からこの洞辺りまで分布していてちょうど両属の分布の接触地帯が日店洞周辺にあったと考えると，*Ryugadous* 属の中でも特異な特徴をもつキウチメクラチビゴミムシとヨシダメクラチビゴミムシとが混棲することになり，その後彼らの間に種の分化が進んでから，那賀川上流地域に棲息する *Ryugadous* 属の別種が雨水に押し流されるなどして，たまたまこの洞に流れつき定着してしまう可能性も，永い年代の間には決して考えられないことではない。この洞は那賀川という大きな流れのすぐ傍にあって，その下層支洞は直接この川とつながっている。ヒミセメクラチビゴミムシはこのようにして今日この洞に見られるようになったのではなかろうか。もちろん上流地域でヒミセメクラチビゴミムシ又はその近似種が発見されていない現在，これはあくまで推察の範囲を出るものではない。

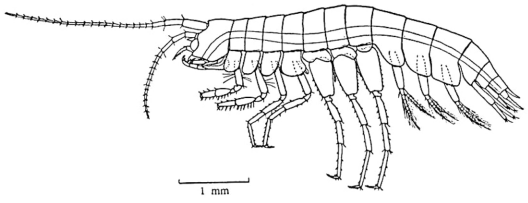


Awatrechus yoshidai S.UÉNO
ヨシダメクラチビゴミムシ
（上野原図）

更に竜ノ窟でも近縁の同属２種のオビヤスデが発見されており，ひじょうに特異な事例として興味深い。このように本県の洞窟にいくつかの例外的な棲息状況が発見されることも，本県洞窟動物相の複雑さを物語るものとして，特徴の一つにあげることができるであろう。

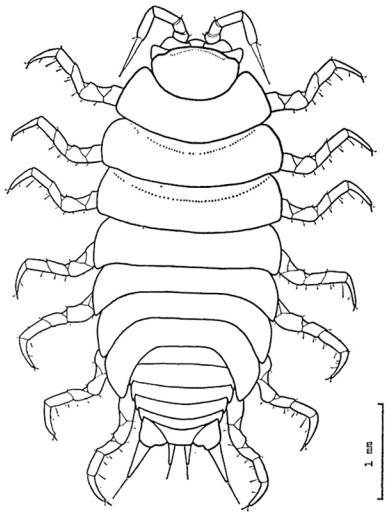
(3) また，本県の洞窟動物の中にはその近縁種が本邦のどこからも発見されていないような特異な種が見られることも注目に価する。

日店洞の地下水から得られたメクラヨコエビの一種アワメクラヨコエビは，かつて阿南市の井戸から発見されたシコクメクラヨコエビが広く中国・四国一帯の洞や地下水に棲息するのに対し，まだこの洞以外のどこからも発見されておらず，その近縁の種さえ本邦及



Awacaris kawasawai UÉNO (in press)
アワメクラヨコエビ
（上野益三原図）

び近隣諸国から発見されていない新属新種であって，一般に端脚類のばあいこのような例は珍らしいことだとされている。また前述の陸棲等脚類アワメクラワラジムシもその一つである。従来本邦の洞窟から陸棲の等脚類は全く発見されていなかったが，竜ノ窟・日店洞・桃源洞及び高知県コウモリ洞（別種？）には比較的稀でなく本種が棲息している。他に本邦では別属の１種３頭が岩手県から最近発見されている以外に報告された採集例はない。そして本種を記載された VANDEL 氏によると，同属の種は遠く東部ヨーロッパのバルカン地方にしか見つかっていないということである。氏はこのグループがバルカン北部を中心にして東方にその分布を拡げて行き，過去のある時代には日本まで連続的に分布していたものが，アジア北部の寒冷化した時期に二次的に分断され，今日のような不連続な分布模様ができ上がったと考え，従っておそらく未調査の中国又はヒマラヤ沿いの地域にも分布しているのではなかろうかと推察しておられるが，このような特異な種が四国の東部だけに棲息することはまことに興味深い事実である。



Hyloniscus uenoi VANDEL
アワメクラワラジムシ

最後に，上野俊一・村上好央・八木沼健夫の諸氏の私信で，それぞれの分野における研究で本県の洞窟動物相は本邦のそれを論ずるばあいに見逃すことのできないきわめて重要な意義をもつものであると一致した見解を寄せておられることを付記しておく。それにつけても，このように貴重な自然の遺産が無惨に破壊されて行く現状はまことに遺憾なことであり，積極的な自然保護の施策が一日も早く実現されることを祈って止まない。

参 考 文 献

本県産洞窟動物に関する文献

1. 川勝正治・大河原玄沖，1968. 淡路島・小豆島・剣山及び赤石山系の淡水産プラナリアの生態調査報告. Jap. J. Ecol., 18 ; 199-204.
2. VANDEL, A., 1968. Les premiers isopodes terrestres et cavernicoles découverts dans l'archipel nippon. Bull. Nat. Sci. Mus. Tokyo, 11 ; 351-362.
3. AKATSUKA, K., &T. KOMAI, 1922. *Pseudocrangonyx*, a new genus of subterranean amphipods from Japan. Annot. zool. Japon., 10 ; 119-126.
4. 上野益三，1933. 日本の地下水から知られた甲殻類. 植物及動物 1 (4) ; 23～29.
5. KOMATSU, T., 1963. Three new cave spiders of genera *Gamasomorpha* and *Masirana* from Japan. Acta arachnol., 18 ; 21-26, pl. 2.
6. ——— 1965. Two new cave spiders of genera *Cybaeus* and *Leptoneta* from Shikoku Island. *Ibid.*, 19 ; 21-24, pl. 1.
7. 小松敏宏，1967. 洞穴のクモ. 昆虫と自然，2(2) ; 8-9.

8. Komatsu, T., 1968. Cave Spiders of Japan, II. *Cybaeus*, *Dolichocybaeus* and *Heterocybaeus* (Cybaeinae). Pp. i+1-38. Osaka, Arachnological Society ofEast Asia. (Partially in Japanese).
9. 八木沼健夫, 1962. 洞穴産の蜘蛛. Bull. Osaka Mus. Nat. Hist., 15 ; 65-77.
10. ——— 1969. ホラヒメグモ属 (*Nesticus*) の分類学上の諸問題. Bison, (61) ; 1-12.
11. Murakami, Y., 1969. Two new species of polydesmid millipeds from limestone caves in Tokushima Prefecture, Japan. Annot. zool. Japon., 42(1) ; 30-35
12. Yosii, R., 1956. Monographie zur Höhlencollembolen Japans. Contr. Biol. Lab. Kyoto Univ., (3) ; 109+22pp.
13. 吉井良三, 1958. 洞穴性跳虫の分布について. 日本生物地理学会会報, 20 ; 13-17.
14. 中条道夫, 1958. 香川県女木島産洞窟棲盲目コオロギモドキに就いて. 観光学術読本「鬼ガ島」, pp1-7. 高松市役所.
15. 中条道夫, 1958. 暗闇は動物を盲目にするか. とくしま虫の国, 2(1) ; 1-3.
16. 川沢哲夫, 1965. 生きている化石昆虫コオロギモドキをたずねて. 植農報, 19(9) ; 31-36.
17. Jeannel, R., 1962. Les Trechini de l'Extrême-Orient. Rev. franç. d'Ent., 29 ; 171-207
18. 上野俊一, 1953. 日本の甲虫〔11〕. 新昆虫, 6(10) ; 39-43.
19. ——— 1953. 日本の甲虫〔12〕. *Ibid.*, 6(11) ; 38-45.
20. Ueno, S.-I., 1955. Studies on the Japanese Trechinae(V) (Coleoptera, Harpalidae). Mem. Coll. Sci. Univ. Kyoto, (B), 22 ; 35-50.
21. ——— 1957. Ditto(VI). *Ibid.*, 24 ; 179-218, pl. 1.
22. ——— 1969. Three new cave trechines of the genus *Ryugadous* (Coleoptera, Trechinae). Bull. Nat. Sci. Mus. Tokyo, 12 ; 17-32.
23. ——— 1969. On the blind trechines of the genus *Awatrechus* (Coleoptera, Trechinae) *Ibid.*, 12 ; 195-209.
24. Watanabe, Y., &M. Yoshida, 1970. Two new species of subterranean *Quedius* (Coleoptera, Staphylinidae) from Shikoku, Japan. Bull. Nat. Sci. Mus. Tokyo, 13 ; 1-8, pl. 1.
25. 石川重治郎, 1954. 四国の洞窟とその動物相(2). Mem, Kochi Women's Coll., 3 ; 34-45.
26. 上野俊一, 1968. ほら穴に生きる生命. 科学朝日, 28(12) ; 43-47.
27. 阿部近一, 1957. 徳島県の洞窟性昆虫について. 阿波の虫, 2(2) ; 2-4.
28. 河野仁一郎, 1965. 徳島県の昆虫相. 南四国の自然 ; 160-164. 大阪, 六月社.
29. 岩崎博, 1963. 禅定の窟の昆虫について. とくしま虫の国, 6(1) ; 31-32.
30. 中根猛彦編, 1963. 原色昆虫大図鑑第2巻（甲虫編）. p. 24, pl. 12. 東京, 北隆館.

本県の洞窟に関する文献

31. 平山健・山下昇・須鎗和己・中川衷三, 1956. 徳島県剣山図幅（地図1, 説明書）. 徳島県.
32. 中川衷三, 1963. 剣山の地質. 徳島郷土双書2, 剣山 ; 51-57.
33. 羊我山人, 1969. 阿河の岩屋. 徳島教育159号（通巻587号）; 66-67.
34. 堀木鶴八, 1916. 阿波名勝誌.
35. 蚕糸共進会, 1923. 徳島県の名勝.
36. 海部郡誌刊行会, 1927. 海部郡誌.
37. 橋本亀一, 1932. 阿波の古跡名勝.
38. 横井希純, 1936. 阿州奇事雑話.
39. 石川静一・塩田勇, 1936. 風穴. Pp.106, 秋田営林局
40. 坂州小学校, 1952. 坂州の姿.

41.　　1954. 加茂谷村誌.
42.　　1961. 木頭村誌.
43. 山内浩, 1964. 洞穴探検. Pp.244. 筑摩書房.

その他参考にした文献

44. 上野俊一, 1967. 日本における洞窟昆虫学の発展. 昆虫, 35 ; 302-311.
45.　　1961. 洞窟生物学. 自然, 16(8) : 11-19.
46. 川沢哲夫, 1969. 羅漢穴の節足動物相について. げんせい, 20 ; 1-8.
47. Barber, H. S., 1931. Traps for cave-inhabiting insects. J. Elisha Mitchell Sci. Soc., 46 ; 259-265.
48. Vandel, A., 1964. Biospeleology ; the biology of cavernicolous animals. Pp. XXIV+1-524. Pergamon Pres, London.
49. Uéno, M., 1965. The present situation of speleology in Japan Konan Women's Coll. Res., (1) ; 253-275.
50. 山内浩, 1969. 洞穴の測量と製図(1). Japan Caving, 1 ; 18-23.
51. 吉井良三, 1968. 洞穴学ことはじめ. Pp. VI+500, 岩波新書.

徳島県博物館紀要

第　1　集

昭和45年3月25日　印刷
昭和45年3月31日　発行

編集・発行　徳島県博物館
徳島市西山手町1丁目

印刷所　原田印刷出版株式会社
徳島市西大工町4丁目